
姉妹の太陽

無銘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉妹の太陽

【Nコード】

N5952Z

【作者名】

無銘

【あらすじ】

かつて兄弟同然の男と望まぬままに殺し合う運命を背負わされた男は、それまですれ違いを続けていた一組の姉妹と出会う。その姉妹を引き裂かんとする陰謀が迫る中で、姉妹と男は何を見るのか…原作崩壊、キャラ崩壊、時系列矛盾、知識不足、独自設定・解釈、捏造等核地雷級の要素が多分に含まれています。読まれる際には十分ご注意ください。それと非常に冗長です。

(前書き)

本作品は原作レイプを通り越して惑星もろとも消滅させる程の暴挙を犯しております。十分ご注意ください。それと非常に冗長です。

富士山近くの林道で一台の車が立ち往生している。エンストのようだ。

「困ったわねえ…こんな場所じゃタクシーなんか拾えないし電話した所で間に合わないし…」

車の主らしい女はエンジン部分を覗き込みながら頭を掻く。一応修理の為に業者には連絡したが、恐らくすぐに修理出来る故障ではないだろう。とりあえず目的地まで行くための足を確保しなければならぬ。

女の目的地はこの林道を抜けた先にある『富士演習場』にあるIS用アリーナだ。と言っても彼女はIS操縦者ではない。彼女の本業は生化学者であり医者である。今回も担当患者の付き添いという形でアリーナへと向かっていた。

彼女の名前は緑川ルリ子。共同研究者のカール博士共々世界的に名の知れた生化学者であり、現在は『国際IS委員会』創設メンバーの一人として籍を置く傍ら、世界唯一のIS操縦者育成機関『IS学園』の校医として働いている。

と言ってもルリ子が校医として赴任したのはそれまで一人で校医をしていた同じく国際IS委員会創設メンバーの一人で、旧知の仲である海堂肇博士の要請を受けた『銀の福音』暴走事故…ルリ子は何者かの作為があったと睨んでいるが…直後の事である。

そしてルリ子は1週間程前に発生した無人ISによる学園襲撃事件

で負傷した生徒会長の更識楯無の治療及び経過観察を担当している。ちなみに傷そのものの回復は楯無自身の回復力やルリ子の治療もあって負傷から三日後にはすっかり元気になっていた。とはいえ完治したかはまだ微妙な所ではあるののでこうして富士山麓まで出張ってきているのだが。

「まあ…仕方ないわよね。あの『学園最強』の専用機が妹を庇ったからとはいえ大破しちゃったんだから」

レッカー車を待ちながらルリ子は呟く。

更識楯無はまだ若いながらもIS学園在学生唯一の国家代表操縦者であり、肉弾戦、IS操縦技量共に秀でた自他共に認める『IS学園最強』だ。

そもそもIS学園の生徒会長は慣例として先代の生徒会長が指名した人物が選ばれるのだが、その指名の条件とは先代の生徒会長に勝利する事である。しかも生徒会の権限はかなり大きい事もありそれを取り仕切る生徒会長の座を狙う生徒は数多い。

その為生徒会長はそれらの生徒を悉く退けられるだけの實力…それこそ学園最強クラスの實力が無ければ務まらない。

そんな生徒会長を長きに渡り務めかつ人望も厚い更識楯無は間違いなく只者ではない。ルリ子にはあまり関係ないが。

そんな彼女だが、先日の無人IS襲撃事件の際に実妹の簪を庇い負傷し、専用機『霧纏の淑女』ミステリアス・レイディも大破した。

『霧纏の淑女』修復にはどうしても学園内では直せない部分があるらしく、妹の簪の専用機『打鉄式式』の再調整も兼ねて楯無と簪は『倉持技研』まで出向いて『霧纏の淑女』修復並びに『打鉄式式』再調整を行っていた。

そして修復や再調整は昨日完了し、本日は最終チェックとして楯無と簪が『富士演習場』にあるIS用アリーナで模擬戦を行う事になっている。

ルリ子は『倉持技研』に楯無の付き添い以外に別の用事があった為楯無達とは一旦別れて『富士演習場』で合流する手筈になっていたのだが、突然の故障である。

時計を見るとあと二時間後には模擬戦が始まる。車なら余裕だが歩きで行くとなると間に合いそうにない。

（遅れるって連絡入れといった方がいいかしら…？）

そんな事を考えて携帯電話を取り出したルリ子だが、自分が通ってきた道の向こうから一台のバイクが走ってくるのが遠目に見えてくる。

これはチャンスだ。別に嵩張る荷物は無いしバイクの後ろにでも乗せて貰おう。交渉に応じてくれるかは分からないが、何もしないよりはいいだろう。

そして緑川ルリ子はバイクの方を一瞥するとヒッチハイクしようと道路へと出た。

富士山麓にある『富士演習場』。本州最大の敷地面積を誇るこの演習場にある食堂のテーブルの一つに少々変わった集団が座っていた。そのテーブルには『IS学園』の制服を着た少女が4人に作業着姿の女性、ブラウスを着た女性、更に男性が2人座っており、1人は白衣を着ている。

（いやゝ我ながら雑然としていると言うか…カオスというか…統一感がないよねゝ）

少女の一人で、袖が異様に長いIS学園の1年生用制服を着用した少女…布仏本音は内心呟く。

本音はIS学園の1年生だ。生徒会の書記を務める傍ら姉で同じIS学園3年生の虚と同じく整備科に進む事を志望している。

そして二人は代々更識家の従者として使えてきた布仏家の一員であり、本音も例外ではない。

本音は現在一番上座に座っている少女…更識楯無とその右脇に座っている少女…更識簪とは幼馴染みであり、簪の身の回りの世話をする専属メイドでもある。

楯無は対暗部用暗部としてその筋の人間から『暗部殺し』と畏怖される更識家の17代目当主であり、『学園最強』を意味するIS学園生徒会長であり、ロシアの国家代表操縦者でもある。

ちなみに楯無とは更識家の当主が代々名乗る名であり彼女の本名は別にあるのだが、それを知る妹の簪を始めとする更識家の人間もあくまで本名ではなく『楯無』の名で呼んでいるし、本人もそう呼ばせている。

日本人である楯無が何故ロシア代表になれたかとかと言うと楯無が『自由国籍権』を持っているからである。

自由国籍権自体はIS操縦者であれば割と簡単に『国際IS委員会』に申請すれば取得出来るのだが、一度取得してしまうと新たな帰属国が決まるまで無国籍状態となり色々と不便が生じる為、他国に国家代表として登用したいと思わせる腕と自信が無ければまず取得する事はない。

しかも他国の人間を代表操縦者にするなど自国の人材不足をアピールするようなものなので余程の実力が無い限り自由国籍権取得者が代表操縦者となる事はない。

逆に言えば楯無の技量がいかに抜きん出ているかの証拠でもある。

ちなみに『特別自由国籍権』というのも存在する。取得すると無国籍状態となる事は変わらないが、こちらは参政権の欠如以外の不都合が無い反面、一度取得すると各国への帰属が禁止され無国籍であり続けなければならない。

当然国家代表などもっての他である。

とはいえこれが与えられるのは国際ＩＳ委員会の中でも特に政治的中立が求められる『ＩＳ学園小委員会』の常任委員のみで、かつ常任委員として在任中の時くらいだ。

そしてその楯無が左隣に座るブラウス姿の女性に向き直り口を開く。

「…わざわざお手数をおかけして申し訳ありません、響子さん」

（これはおりむー達が見たら驚くだろうな）

本音は丁寧な態度や口調で恭しく女性に接する楯無を見て『おりむー』こと織斑一夏の事を思い浮べる。

容姿端麗、文武両道、明瞭快活、編み物以外の家事も得意、スタイルも抜群で高いカリスマ性をも兼ね備える事から生徒から高い人気を誇る楯無だが、同時にフランクかつ飄々とした言動で周囲の人間を自分のペースに持ち込み散々に振り回す『人たらし』でもある。

勿論一見悪戯にしか見えない言動にも何かしら更識家当主としての判断や思惑があつての事なのだが、悪戯好きであるのもまた事実である。

そんな彼女に散々振り回されてきた一夏がこうやって隣の女性に礼儀正しく接している楯無の姿を見たら腰を抜かすのではないかと本音は思っている。とはいえ本音を含む此処にいる人間からすれば楯無の態度はむしろ当然なのだが。

しかし響子と呼ばれた女性は穏やかに笑いながら首を振る。

「気にしないで、楯無さん。私が出来る事はこれくらいだし：『霧纏の淑女』の修復に私の協力が必要なのは分かっていた事だから」

女性の名前は的場響子。更識家の分家筋とされる的場家の一人娘にして楯無と簪の父の従兄弟、そして楯無・簪姉妹の保護責任者であり後见人だ。

響子はまだ中学生の頃に世界征服を企む悪の組織『クライシス帝国』に両親を殺され、響子にとって父方の伯母夫婦：楯無・簪姉妹の祖父母に引き取られた。

『クライシス帝国』壊滅後は同じく両親を失った一組の兄妹を当主の許可を得た上で更識家に引き取り、兄妹の母親代わりとして更識家の屋敷で一緒に暮らしていた。

そしてまだ幼い楯無と簪を遺して響子の従兄弟に当たる先代当主とその妻が相次いで亡くなると、更識家に恩義を感じていた彼女は兄妹に加えて楯無・簪姉妹の親代わりとして二人を育て上げ、楯無が成長する迄の間当主代行を務めていた。

今でも未成年かつ何かと多忙な楯無に代わり更識家内の事は楯無の頼みで響子を取り仕切っている。

的場家は更識家とは縁こそ深いものの更識家の『暗部殺し』の稼業とは縁のない『堅気』の家である。実際響子の父親は浄水場の所長、母親も専業主婦で、響子も更識家に引き取られるまでその稼業を知らなかったごく普通の中学生であった。

そんな彼女が何故更識家の当主代行を務めたかと言うと、的場家と更識家の少々複雑な関係に理由がある。

対外的には的場家は更識家の分家筋とされているが、系譜・血筋的にはむしろ的場家の方が本家筋に当たり、更識家でも的場家を本家として遇している。

更識家は平安時代後期の武将で弓馬の術に長けていた事で知られる『新羅三郎』こと『源義光』を祖とする『甲斐源氏』の一族だ。

そして更識家の先祖は代々弓の名手として知られ、射的場：『的場』近くに館を構えていた事から鎌倉時代頃から『的場』氏を名乗るようになっていた。

時代が下り戦国時代に入ると的場氏は同じ甲斐源氏である戦国大名『武田氏』に仕え、その武芸を以て主君の護衛役を務める傍ら、防諜活動に従事していた。

特に武田信虎に仕えた『的場阿波守信正』は敵が放った刺客や間諜を悉く発見しては血祭りに挙げ、戦場でも護衛として幾度となく危機を救った事から、その武勇と知略を讃えられ源義光以来代々武田家に伝えられた『その堅牢さ故に楯もいらぬ』とされる家宝の鎧から取った『楯無』の名を送られ、また子孫も名乗る事を許された。

その後も的場信正は武田氏に仕えるも息子の信頼の代に武田氏は滅亡し、信頼は徳川家康の配下として召し抱えられた。

当初は家康の部下『井伊直政』の配下であったが、『本能寺の変』に際して家康が僅かな手勢で伊賀を越える際に護衛役の一人として同行し、伊賀の地侍に襲われた際には大いに奮戦した事を家康に認められ、家康直参として改めて召し抱えられた。

江戸幕府が開かれた後はその経歴を買われて柳生但馬守宗矩の片腕として活躍し、主に外様大名に対する防諜を担当するようになり、この頃からの場氏は『暗部殺し』として本格的に活動し始める。

だが江戸時代中期に入る頃に場的場氏の嫡子がある理由から『暗部殺し』としての任に不適とされ、代わりに分家が『暗部殺し』の任と『楯無』の名を受け継ぐ事になった。

そしてその分家は『更識』氏を名乗っており、以後更識家の当主が代々『楯無』の名を継ぐようになった：つまりその分家の当主が初代『更識楯無』である。

ただし更識家が継いだのはあくまで『暗部殺し』の任と『楯無』の名だけであり、家系としては嫡子の方が正統な本家筋であり、所領や家宝等はこちらに引き継がれた。

その後の場家は裏の世界には一切関わらずに過ごしたが、それでも両家の間には通婚関係等交流があった。

だが的場家の方は代が下るごとに『暗部殺し』の記憶が風化していき、響子の代にまでなると更識家は『古い屋敷に住んでいる親戚』くらいの認識しかなかった。

更に言えば的場家の方も更なる分家や断絶などもあり、現在までに唯一残った響子の家系は的場家の中では傍流に位置する。

そして的場家の嫡子：すなわち響子の先祖が『暗部殺し』の任から外された理由は彼が異能の力を：簡単に言えば『超能力』を持っており、それを悪用される事を懸念した為だ。

それ以来の場家の人間の中には時折何らかの強いショック：例えば両親が惨殺される：がきっかけとなり先祖と同じ力：水を操る超能力が発現する時がある。

そして響子はその的場家の中でも先祖すら軽く凌駕するとすら言われる程強大な超能力の持ち主である。

彼女は両親をクライシス帝国に殺害された事が引き金となり、更に能力開発の特訓に励んだ事もあって念動力と水を操る能力や水を介した遠隔視能力、更には水を作り出す能力を身につけた。しかも一度に操れる水の量も尋常ではなく、やろうと思えば水を使ってISすら撃墜出来るのではないかと本音は考えている。

そして『アクア・クリスタル』から発生したナノマシンを使い水を自在に操るという特性を持った『霧纏の淑女』の完成には響子の協力による所が大きい。

元々『霧纏の淑女』はロシアで設計され、技術的理由で開発が放棄された機体を元に楯無が1人で組み上げたのだが、実用化の際に最も難航したのが『アクア・クリスタル』及び水の発生・制御方法である。

そこで楯無は水を操る超能力者である響子に協力を要請し、響子に水を操ってもらいその時の脳波パターンや動作パターンをベースに独自のナノマシン制御プログラムを作成し、『アクア・クリスタル』に組み込む事でどうにか完成までこぎつけた。

だが先日 of 無人IS襲撃の際に『アクア・クリスタル』も損失し、プログラムが破損した事から『霧纏の淑女』の修理は学園では不可能であると判断した楯無は再び響子に協力を求め、どうにかしてプ

ログラムの再構築と改良に成功した。

超能力を使えば響子も体力を消耗するのだが、響子は楯無の要請を二つ返事で承諾した。楯無が丁寧な態度になるのも無理はない。

「それに血こそ繋がっていないけど楯無さんも、簪さんも、虚さんも、本音さんも：私にとっては大切な家族だもの」

「そうそう。だからそういう水臭いの無しだぞ、楯無：水臭いといえば簪、お前もだ！『打鉄式式』なら言ってくれば俺が：」

「：でも茂兄さんには迷惑かけたくなかったし：」

「それが駄目なんだって！それが！」

そう言って白衣を着た男が不満そうに簪に口を尖らせる。

男の名は佐原茂。かつてクライシス帝国に両親を奪われ、クライシス帝国壊滅後に更識家の屋敷に転がり込んだ兄妹の片割れであり、現在は技術者として『倉持技研』に勤務している。

茂が引き取られて大分後になって産まれた楯無・簪姉妹とはかなり歳が離れているが、元々妹がいる上に家族を失っていた事もあり、二人が幼少の頃から兄貴分として実の妹のように可愛がっており、楯無と簪も親愛の情を込めて『兄さん』と呼び親しんでいる。

ちなみに最初は『茂さん』と呼んでいたがそれだと他人行儀過ぎる、かと言って『お兄ちゃん』と呼ばれるには少々歳が離れすぎている上茂の実妹と被るいう事で『兄さん』と呼ぶ事になった。

「：でも最近『白式』の調整が大変でまともに寝れてないって聞いてたし：」

「大丈夫大丈夫。それくらい、屁でもないって」

心配そうに続ける簪を茂は笑い飛ばす。

茂は『倉持技研』の中でもエース揃いとされる第一開発室を束ねる室長として主に『倉持技研』が開発した織斑一夏専用機にして第4世代の技術が使われている『白式』の開発・調整及びデータ収集を担当している。

茂はまだ若くかつ男性の身でありながら倉持技研製の第二世代量産機『打鉄』及びその後継機『打鉄式式』の設計・開発担当者であり、女尊男卑の世の中にあって珍しい腕の良い男性のIS技術者としてその筋では知られている。

腕だけでなく男女問わずに公平な接し、誰にでも物怖じせずに周囲を引っ張っていく良い意味でガキ大将的なリーダーシップを持つ事から男女問わず社内でも人望が篤い事に加え、世界初の男性操縦者である織斑一夏の専用機なら担当者も男性の方が良いというのもあって、主に量産型開発に従事する第四開発室の室長補佐から歴代最年少となる第一開発室長へと抜擢された。

茂本人は堅実な設計を好んでいる事もあり、設計思想からして色々とかせの強い『白式』を担当するのは気が進まなかったが、仕事の方はきっちりこなしている。

むしろ今では『形態移行』に伴い更に燃費が悪化し運用が困難になった『白式』が少しでもまだ経験の浅い一夏でも扱い易くなるよう

にと、『白式』が『倉持技研』に送られてくる度に少しでも一夏の要望に沿おう部品単位で細かく再調整し、その都度一夏に調子や問題点などを事細かく尋ね、更なる改善点を洗い出す為に最近ではメールのやり取りを始めた他、時にＩＳ学園まで赴き直接一夏と話して微調整を行うなど精力的に仕事をしている。

その上ただでさえ『白式』のせいで非常に多忙なのに、人員が『白式』の開発やデータ収集に割かれて未完成状態であった『打鉄式式』の組み立てや調整・データ収集も僅かな暇を見つけては茂一人で行っていた。

勿論そんな事を続けていて休んでいる暇などではなく、ここ２ヶ月は開発室で仮眠するくらいでまともに寝ていないと簪や本音は聞いている。

簪が『打鉄式式』を自らの手で組み上げる事を申し出たのは優秀な姉へのコンプレックス解消の手段という側面もあるが、茂の過労死しかねない働きぶりを見かね少しでも茂の負荷を軽く出来ればと思った為でもある。

というより一夏を殴ろうかとも考えたのは『白式』のせいで茂の多忙さに拍車が掛かったから、というのが最大の理由だ。

「いいじゃない、お兄ちゃん。それもいい経験なんだし：何よりそうしたからこそ『理想のヒーロー』こと愛しの織斑一夏に出会えたんだから。ね？簪」

「ひとみ先生！？な：何でその事を！？」

「私と貴女がどれくらい長い付き合いだと思ってるの？それくらい、

顔を見ればすぐ分かるわ。それとここでは『ひとみ姉さん』でいいわよ?」

そう言って作業着姿の女性：佐原ひとみは簪に快活に笑ってみせる。

ひとみは兄の茂共々クライシス帝国に両親を殺された後に響子に引き取られ、更識家へとやってきた。彼女自身家族を失った為か楯無・簪姉妹及び虚・本音姉妹が誕生すると「妹が出来た」と喜び、4人が幼い頃から何かと『姉さん』として世話を焼いていた。

『姉さん』呼ばわりなのは簪の『お姉ちゃん』である楯無との区別の為でもある。

ひとみはISの整備士をしておりISの整備士不足が深刻だった時期にはISを完全に整備出来る数少ない人物として、IS学園設立当初から整備科の教員として勤務する傍ら国防軍のIS整備斑班長も兼任していた。その為現在の整備科教員の殆どは彼女の元教え子か元部下である。

ひとみの尽力もあり整備士の人員が揃ってきた現在は国防軍との兼任を解かれ、整備科主任教員として整備科の生徒や教員達を取り纏めている。そして設立当初から新聞部と生徒会の顧問を掛け持ちしている。

「簪も中々人を見る目があるじゃない。ま、それでも…」

「『光太郎さんには及ばない』、だろ?あのな、ひとみ…そんなんだからいつまで経っても彼氏が出来ないんだぞ?」

「なによ!お兄ちゃんだって今までで一回も彼女作った事ないじゃ

ない！」

「別にいいだろ！俺にだっていつかは…」

「その答え何回聞いたと思ってるの！？どうせ作る気なんか無いクセに！大体この前葉月とお見合いしたら『人間としては素晴らしいけど男性としてはちょっと…』と言われたのはどこの誰よ！？せっかく私がセッティングしてあげたのに…お兄ちゃんときたら…！」

「いや…それはだな、ひとみ」

「言い訳しない！こっちはいつお兄ちゃんが結婚出来るか心配で堪らないんだから！」

「…うっ…」

ひとみに言い負かされてたじたじになる茂の姿を見て楯無、簪、虚本音、響子は苦笑する。

茂とひとみは傍目から見ても分かるくらい仲睦まじい兄妹なのだが、口喧嘩になると茂はいつもひとみに言い負かされる。

元々ひとみは兄よりしっかりしていた上に成長すると兄に似てしまったのか男勝りで豪快な性格の女傑としてIS学園整備科では『ひとみ姐さん』、『佐原の姉貴』、『姐御』などと呼ばれており、ひとみも授業や学園行事中以外では本人の前でそう呼ぶ事を生徒達にも公認している。

同時にその豪胆さから見る目は中々スタイルの良い美人なのにも関わらず女からはラブレターすら送られるのに男は全く寄り付かず、しかも本人はそれを全く気にしないので、常々茂の気を揉ませている。

もつとも、ひとみの言った通り茂も茂で同じ穴のむじななので人の事を言えた立場ではないが。

その為新聞部で毎年行う生徒を対象としたアンケート調査の内『彼氏が出来そうにない教師』、『結婚出来そうにない教師』、『恋人にしたい教師』、『結婚したい教師』部門において新聞部創立以来毎回ぶっちぎりの一位を獲得し続けている。

その豪胆さを語るエピソードは第2回モンド・グロッソ決勝戦の際には休憩と称して担当していた日本代表機『暮桜』の格納ハンガーを空にして酒盛りを始めたせいで、『暮桜』が織斑千冬により無断で持ち出された、生徒会顧問就任後は事ある毎にド派手な行事を提案しては生徒会に予算が足りないと止められた、織斑一夏が楯無の独断で生徒会副会長になった際にも二つ返事で承諾した挙げ句早速一夏に生徒会の仕事を押しつけた、など事欠かない。

反面細やかな気遣いも出来る一面も併せ持ち、整備科の生徒が『打鉄式』を完成させる為にひとみに無断で学園備品の『打鉄』の部品を多く持ち出した際にも咎める所か生徒達がより部品や機材を円滑に確保出来るように密かに各方面に手を回していた。ひとみはその事を誰にも話していないが。

その豪胆さと幼い頃からよく知っており弱味も多く握っている事からひとみは後見人の響子、そして学園校医の緑川ルリ子と並んで数少ない楯無が頭が上がない人物でもある。

「けど毎回毎回思うんですけどその『光太郎さん』って人本当にいるんですか？」

「本音、私とお兄ちゃんが嘘つくと思う？」

「だってそんな漫画に出てきそうなヒーローみたいな人がいるなんて言われても信じられる訳が……」

そこに本音と虚が割り込んでくる。

楯無、簪、虚、本音は幼い頃から響子や茂、ひとみから『光太郎さん』こと『南光太郎』という男の話をよく聞かされていた。

その南光太郎という男は茂とひとみの父方の従兄弟に当たる人物で、二人の父が経営していた航空会社のヘリパイロットであると同時に一年半ほど佐原一家と一緒に暮らしていたらしい。

そしてクライシス帝国の魔の手から響子や茂、ひとみの命を救い響子やその仲間と共にクライシス帝国と戦い続け、そして勝利した男とも聞かされていた。

茂やひとみ、響子が語るその男の活躍はまさにヒーローそのものであり、特に簪が勧善懲悪のヒーローものにハマるきっかけとなったのは茂達が語るこの南光太郎である。

だが簪以外の3人は実在を完全に疑っている。その簪ですら当初から半信半疑であり、自らの『理想のヒーロー』像を見出した一夏と出会い、そして惚れてからは『疑』の割合が8割程になっている。

話を聞く限りでは南光太郎は明るく陽気で前向きで、しかも優しい上に正義感も強く勇氣も備え悪へと敢然と立ち向かい、そして打ち倒すという典型的な『ヒーロー』だ。

しかも肉親を失い、それ以外にも多くの苦しみや悲しみを味わって尚人々の為に立ち上がり、悪と戦い続けてきたという人間とは思えぬ精神力の持ち主であるらしい。

そんな『完全無欠のヒーロー』に近い男が実在するなどとは言われてもにわかには信じ難い。『暗部殺し』として裏の世界に通じている更識家の人間からすれば尚更だ。

それを知ってか響子と茂、ひとみも苦笑したままだ。

そして本音は先程から自分の隣で話にも加わらず黙々とどんぶりに山盛りのご飯を『もきゅもきゅ』という擬音が似合いそうな食べ方で頬張っている男に声を掛ける。

「ジョーさんはどう思いますか？」

「ふぁ？ふぁにひいの…むぐっ！？」

「食べながら喋っちゃ、よく噛んで食べなきゃ駄目ですよ？」

そう言って本音はご飯を頬張りながら喋ろうとした挙げ句、喉に詰まらせたジョーと呼ばれた隣の男に水を渡し背中を擦ってやる。

「…ふう。サンキュー、のほほんちゃん。兄貴の事か？だったらこの『霞のジョー』様が実在するって保証してやるぜ！勿論三人の話が本当だって事もな！」

「なんかジョーさんがそんな事言うと思憑性が一気に低下しますねえ」

「なあ、のほほんちゃん…俺ってそんなに信用ないのか？」

「だってある朝外に出てみたら何故かお屋敷の前に行き倒れてましたし」

「それあんまり関係ないか!？」

そう言って男…霞のジョーは本音にツツコミを入れる。

ジョーは本音をしてカオスと言わしめたこの集団の中でも一際異様な存在だ。

格好からして演習場内だと言うのにIS学園の制服姿の4人、仕事着姿の佐原兄妹、民間人の為私服だが地味目のブラウスの響子と違いこの男は額にバンダナらしき物を巻いたかなりラフな格好をしている。

しかも模擬戦前という事で皆軽食で済ませているにも関わらずジョーだけどんぶり飯を食べている。しかも今食べているのは二杯目だ。

更に言えばこの男だけ更識家と関わるようになったのは本音が産まれた後…しかもつい最近…今年の夏休みに入った時くらいからと此処にいる経緯からして異様だ。

本音がジョーと出会ったのは、学園が夏休みに入り姉と共に仕事で楯無と簪に従い更識家の屋敷に帰った翌朝の事であった。

その日の朝、打ち水でもしようとバケツを持って門の外に出てみたら、門の前に男：霞のジョーが倒れていた。

最初は死体かとも思ったが、試しに本音がバケツの水をぶっかけてみたら反応があった為屋敷まで引き摺っていき、当主である楯無の判断を仰ぐ事にした。

その際近くにいた響子や茂の話で男の名が霞のジョーであり、響子達の古い知り合いであると判明した為楯無の一存で屋敷で手当てを受ける事になった。

そして回復したジョーから響子達とはクライシス帝国を相手に共に戦った戦友である事、今は失った自分の記憶を探す旅をしている事、そしてここ最近飲まず食わずの生活が続き行き倒れていた事など粗方の事情は聞かされた。

更にジョーは一宿一飯の恩義として更識家の用心棒となる事を申し出、響子や茂、ひとみの口添えもあり、「面白そうだから」という楯無の一言で更識家の食客となった。

その際に本音は更識家のしきたりや屋敷の案内などをする教育係を命ぜられ、暇さえあればジョーに色々教えていた。

それ以来本音とジョーは何故か互いに妙に馬が合う事もあり何かと仲が良く、ジョーは本音を「のほほんとしてそうだから」という理由で『のほほんちゃん』と呼び、本音は本音で明るく陽気で少々がさつで明け透けなジョーに対しては割と思いい切った事もストリートに言っている。

もつとも、楯無がジョーを食客として更識家に招き入れたのはただ単に「面白そうだから」だけではない。

実はこの霞のジョーという男、生身同士の白兵戦に限って言えば楯無よりもずっと強い。

楯無が実力を試すつもりでジョーと立ち合ってみた際に、生身でも『学園最強』の名に恥じぬ強さを誇る楯無が逆に翻弄され、手も足も出ずに敗れ去った時の衝撃は今でも忘れられない。

まずパワーとスピード：身体能力が明らかに人間離れしており、技術でも楯無より一枚上手だった。更に経験でも楯無を上回っている事は立ち合いを見ていた本音にもよく分かった。

しかも隠密行動を得意としている事もあり、現在ではジョーの生活の保証と記憶に関する情報を可能な限り楯無が収集・提供する見返りにジョーは楯無の相棒的存在として仕事を手伝っている。

実際にジョーは楯無の見込んだ以上の活躍を果たしており、楯無曰く安い買い物をしたとの事だ。

とはいえ最新参のジョーには更識家における発言力など無きに等しく、本音や楯無、更に簪や虚にすら割とぞんざいに扱われているが。

（しかし見れば見る程共通点が多いね〜ジョーさんと『更識丈』^{じしちやう}って）

ふと本音は自身の父や先代楯無の友人で、父からよく聞かされていた更識家の分家出身の男：更識丈と霞のジョーとを引き比べる。

更識丈：分家の出ながら先代楯無に勝るとも劣らぬ実力の持ち主として『霞』の称号を名乗る事を許された男。そしてクライシス帝国が絡んでいると思しき怪事件を調査しに行ったきり消息不明となった『失われた更識の男』。

更識家では初代楯無以来、当主には楯無の名前と共に『雨かんむり』の漢字一文字で表される称号を与えられる。

これは楯無間の区別を付ける為のものであり、例えば初代楯無は『雨』の称号が、17代目である今の楯無には『霧』の称号がそれぞれ与えられている。

その為楯無を区別して呼ぶ際には『雨の楯無』、『霧の楯無』というように称号を楯無の前に付ける事で識別可能になっている。しかし『楯無』以外にも更識家の人間で特に優れているとその代の『楯無』が認めた者には例外的にその称号を与えられる事がある。

更識丈もまたその一人であり、15代目『霰の楯無』により『霞』の称号を与えられた『霞の丈』：今本音の横にいる男の名前と全く同じ読みである。

しかもジョーが使う霞流拳法なる流派はかなりアレンジこそされているが、更識家に伝わる古武術とかなり似通っている。特にジョーがよく使っている『釵^{さい}』の型は更識家伝来のそれと酷似していた。そして更識丈は更識家でも数少ない釵の使い手として釵を好んで使っていた。

偶然としては少々出来すぎているが、本音以外の更識家の人間は誰

一人として霞のジョーと更識丈の共通点には気付いていない。

理由は更識丈に関する記録や写真の類が殆ど残っておらず、本音と虚の父以外で更識丈を知る人間も本音達が幼い頃に皆鬼籍に入っている。そもそもここにいる人間で更識丈の存在を知っているのは父から話を聞いた事がある本音だけだ。

その本音も霞のジョーが更識丈である確率は低いと睨んでいる。

まず性格が全然違う。ジョーは明るく陽気で少々がさつだが、丈は物静かで冷静沈着な性格であったと聞いている。

何より見た目だ。写真こそ残っていないが、年齢的には更識丈は父と同年代である。だが目の前にいるジョーの見た目は茂よりも幾分か若く見える。茂やひとみは勿論響子もさん付けで呼ぶ辺り実際はもっと歳上なのかも知れないが、それでも見た目が若すぎる。

そんな事を考えていた本音だが、時計を見て立ち上がった楯無に続くように未だ食事中のジョーを促し食事を止めさせると自身もまた席から立ち上がった。

富士山麓にある道を一台のバイクが疾走していた。

白いジャケットに白いズボンを履いた青年が運転する後ろに眼鏡を掛けた黒髪の女性が座っている。

「ごめんなさいね、急いでる所をわざわざ送って貰っちゃって」

「いえ、俺も『富士演習場』に行く用事がありますから」

声を掛ける女性：緑川ルリ子に対して青年：南光太郎は朗らかに笑って答える。

光太郎がルリ子と出会ったのは車が故障したルリ子が走ってくる光太郎のバイクをヒッチハイクした時だ。ルリ子が『富士演習場』まで乗せてくれるように光太郎に頼んだ時には二つ返事で快諾し、今はこうしてルリ子を後ろに乗せて走っている。

時折後から「ニヒヒ」やら「ウエヒヒ」やら聞こえるような気もしたが光太郎は気にしない事にした。

光太郎が『富士演習場』へと向かっているのは大学時代の先輩であり、自身と兄弟同然だった秋月信彦が所属していたサッカー部の伝説的OBでもあるインターポール捜査官、滝竜介から依頼を受けての事だ。

竜介の話ではある『組織』がその日行われるロシア代表機『霧纏の淑女』と日本代表候補機『打鉄式』の模擬戦に合わせて何か行動を起こすという情報がインターポールに入った為だ。

（『亡国機業』…一体何の目的で…？）
ファントム・タスク

内心光太郎はその組織：『亡国機業』の行動に疑念を抱いていた。

『亡国機業』：クライシス帝国壊滅から暫く後に本格的に活動を開始した、世界中を又に掛け暗躍する謎の秘密結社。その目的などまだ分からない事は多いがその活動は規模の多寡こそあれ『シヨッカ』とあまり変わらない。光太郎とその先輩達が現在戦っている新たな悪の組織だ。

特に最近ではISに目を付けているらしく、優秀なIS操縦者の拉致や高性能機の強奪作戦等を世界各地で展開しており、中にはイギリスの第3世代機『サイレント・ゼフィルス』などのように成功した事例も存在する。

光太郎達も計画を発見しては虱潰しに潰してきたが、敵の規模が大きい上に世界への浸透度は歴代組織：恐らく『ゴルゴム』すら上回っている為か、いくら計画を潰しても大したダメージにはなっていないらしく現状はイタチごっこの状態だ。

とにかく目的が分からないので行動が予測し難い。今回も専用機の強奪が目的かと思ったが、相手は国家代表、しかも日本側の防空網を突破してそれを行うのはリスクが高過ぎる。

だが光太郎はすぐに疑問を振り払う。

（姉妹を…たった一人の大切な姉妹を…家族を引き離すなどという暴挙は、この俺が許さん！信彦と…罪もないクライシス帝国の人々の為にも！）

しかし光太郎は直感的に今回の『亡国機業』の計画は『霧纏の淑女』と『打鉄式式』の操縦者：更識楯無とその実妹である更識簪を何ら

かの形で引き離そうとするものであろうと確信していた。理由などない。ただの勘だ。

別にISに関しては人並み以上に知っている訳ではないが、今回はある理由からちゃんと予習として2機の操縦者について調べてきてある。

そして操縦者二人が姉妹と知った時、光太郎は過去の自分と自分と兄弟同然に育った男：秋月信彦の事が真っ先に頭に思い浮かんだ。

光太郎は幼くして両親を失い信彦の父総一郎に引き取られ、信彦とは兄弟同然に育った親友同士だった。同じ日食の日の同じ時刻に生まれ、同じ家で同じ時間を共有した、世界中でたった一人の兄弟同然だった。

だが19歳の誕生日に光太郎と信彦は暗黒結社『ゴルゴム』により改造手術を施され、ゴルゴムの支配者『創世王』候補の改造人間『世紀王』として光太郎は『ブラックサン』に、そして信彦は『シャドームーン』へと改造された。

幸い光太郎は脳改造前に総一郎の助けもあり脱出出来たが、信彦は脳改造をされ、ゴルゴムに戦いを挑んだ光太郎の前に『シャドームーン』として：『創世王』になるべく互いの腹部に埋め込まれたキングストーンを光太郎と奪い合い、そして殺し合う『世紀王』の一人として立ちはだかった。

光太郎はゴルゴムの野望を阻止するためにシャドームーンと：信彦と戦い続け：そして、自らの手で：殺した。

更に復活したシャドームーンをも手に掛けた事と合わさり、二度に

渡り信彦を手には掛けた事は、クライシス帝国滅亡の際に皇帝の悪あがきにより道連れにされた罪もないクライシス帝国五十億の民を救えなかった事と共に未だに光太郎の中に強い罪悪感や後悔、自責の念を抱かせている。

クライシス帝国滅亡後の光太郎は悩んだ。そんな自分が：親友を二度も手に掛け、大勢の人々を救えなかった自分がおめおめと生きて、ましてや人の為に戦い続けていいのか迷い、苦しんだ。

そんな光太郎に道を示してくれたのはショッカーから『バダン』までの組織と戦い、そして海外でゴルゴムやクライシス帝国と戦い、叩き潰してきた男達：そしてクライシス帝国との決戦に際して海外から駆け付けた10人の仮面の男達：『仮面ライダー』であった。

実は光太郎が10人の仮面ライダーの素顔を初めて見たのはクライシス帝国が壊滅した少し後の事だ。彼らはクライシス帝国との決戦の間は一切『変身』を解除する事は無かったからだ。

その理由を光太郎は知っている：彼らはボロボロだった。本来ならば変身を保つ事はおろか、立っている事すら出来ないくらいその肉体はボロボロだったのだ。

ゴルゴムとの戦いに光太郎は一度敗れ、日本はゴルゴムに一時期占領された。幸い海外で奮戦していた仮面ライダー達が海外のゴルゴム勢力を一掃し、光太郎もまた『クジラ怪人』の助けで蘇り本拠地を叩き潰した事で最悪の事態だけは免れたが、仮面ライダー達にとって後輩を援護出来ず無為に死なせ、多くの人々を助けられなかった事への後悔があった。

だからこそクライシス帝国との決戦が間近に迫ると彼らは前にも増

して奮戦した。それこそ改造人間としてのスペックは光太郎やクライシス帝国の怪人達に劣る筈の彼らが、クライシス帝国をして光太郎に優るとも劣らぬ脅威と恐れられる程の勢いでクライシス帝国の拠点や計画を片っ端から、完膚無きまでに叩き潰し、光太郎の下に駆け付ける少し前には海外のクライシス帝国勢力を完全に掃討し終えていた。

だが、そのような無理をして代償が無い筈がない。彼らは、ボロボロになっていた。

変身して改造人間としての機能をフルに発揮し続けていないと歩く事すらままならないから、変身を解除してしまうと意識すら手放してしまうと分かっていたから、彼らはずっと変身し続けたままだった。いくら事情を知らなくともずっと変身し続けていれば子どもだって違和感に：そして理由に気付く。

でも誰もそれを言わなかった。言えなかった。そんな事を言えばそんな身体になっても尚光太郎達の下へと駆け付け、あまつさえ怪人相手に奮戦してみせる彼らの心を：魂を汚してしまうからだ。

本当ならその拳は障子紙すら貫けなかっただろう。その蹴りは小石すら蹴り飛ばせなかっただろう。判断力だって最早自分とそれ以外の区別が付くくらいだっただろう。だが彼らは精神力でそれを補い、そんな事を光太郎達が戦闘中は忘れかける程の奮戦を見せ付けた。

もっとも、仮に彼らが万全で、かつ光太郎がその場にいたとしても『ガイナニンプー』が仮面ライダーに化けて紛れ込むという策を使われたら、どの道吾郎以外気付かずに終わっていた自信がある。

そんな間抜けを超越して正気を疑いたくなるような策を取るなど誰

も思わないからだ。その意味ではガイナニンポーは人間の心理というものをよく理解していたのかもしれない。ただの馬鹿という可能性も否定出来ないが。

吾郎がいち早く気付けたのは彼が子どものような単純さと、それでいて細やかな気配りが出来る：例えば毎日出社してきた光太郎の顔を一目見てその時の体調や調子を読み取って、毎回微妙に塩加減や味付けを変える：料理人としての洞察力を併せ持つが故だろう。

そんな光太郎にとって誇らしく、尊敬する先輩達と素顔で話す機会が、クライシス帝国壊滅後にあった。

そこで光太郎は自らの悩みを、苦しみを、迷いを：思いの丈を全て先輩達に話した。

―なら秋月信彦の分も、クライシス帝国の人々の分も、それ以上も―守り、助け、その為に戦い続け―仮面ライダーとして生き続ける―俺で―君以上に罪深く、愚かで、身勝手で―それでも先輩達に出会って変わった、変わった、変わりたいと願い―人々の為に戦い続けたいと願った俺で良かったら、力になろう―

そう村雨良が―かつて悪の尖兵として活動し、復讐に囚われた過去に苦しみながらも仮面ライダーとして人々の為に戦い続ける事を選び、そうしてきた先輩が言ってくれた。

―確かに君の手は血塗られているのかも知れない。けど同時に君の手は沢山の自由と平和、命を守り、救ってきた―そしてその身体、その命には沢山の人の夢や希望、そして未来が託されているんだ―だから、君は人の為に戦える―俺が―俺達が、そして君に自由や平和、命を守られ、救われ、君に夢や希望、未来を託した人達が

保証するよ―

そう沖一也が―人類の夢を守る為に人間の身体を自ら棄て、人々を護る為にその拳を進んで血に染めて、夢や希望、未来を守り続けてきた先輩が言ってくれた。

―君は戦っていいんだ、仮面ライダーとして―今生きている人達の為に、そして君が守れなかった人達の為に、誰かの涙を拭って、笑顔にして―今生きている人々を守る為に戦って、生き続けて―仮面ライダーを名乗って、戦って―生き続けても、いいんたぜ―

そう筑波洋が―悪の組織に家族を奪われ、改造人間となって尚迷わずに人々の為に悪と戦う道を選び、そうしてきた先輩が言ってくれた。

―確かに君の身体は俺と同じで汚れている―だが―いやだからこそ君が手に掛けた秋月信彦の、死んでいったクライシス帝国の人々の後悔と、無念と、未練と―生きた証を背負って、そして生きて君を大切に思ってくれている人達の為に、仮面ライダーとして生きて、生きて―最後の最後まで足掻いて、生き続けろ―それが―今の君に出来る事だ―

そう城茂が―かつて復讐の為に自ら肉体を悪へと差し出して尚親友と愛する者の生きた証を背負い正義の為に戦い続けている先輩が言ってくれた。

―コウタロウ、オマエがノブヒコの『トモダチ』だったなら―クライシスに住んでたみんなの『トモダチ』だったなら―そしてシゲルやヒトミ、キョウコ、レイコ、ジョーの『トモダチ』だったなら―『トモダチ』がいたこの世界を、『トモダチ』がいるこの世界を守

っていい―守ればいい―それがオマエが、オレ達が『トモダチ』に出来る事だから―あとコウタロウ、オレとオマエも『トモダチ』だからオレもオマエと一緒に泣く、悩む、苦しむ―だから、一人で抱え込むな―オレ、オマエ助けて―守るから―

そうアマゾンが―友の為に命を懸けて、友がいる世界を、そしていた世界を守り続けてきた先輩がそう言ってくれた。

―君のその身体は君の両親や君の家族、仲間―それに君に助けられ、君を助け、信じ、そして応援してくれた多くの人々、そして秋月信彦やクジラ怪人、クライシス帝国の人々のように君に死んでいった人達の思いが託されている―だから、君はその人達の思いに応える為に、戦って―仮面ライダーとしての生き様を貫けばいい―きつと、ご両親や秋月信彦、クジラ怪人、クライシス帝国の人々もそれを望んでいると思うから―

そう神敬介が―死んだ父や恋人、その妹に思いを託され、海のみならず人々と世界を守る為に戦い続けてきた先輩が言ってくれた。

―確かに君の罪は重く、深いかもしれない。だからこそ君は独り生き残るという罰を与えられたのかもしれない―ならばその身体を、その命を使って一生掛けて、その時がくるまでずっと償い続けられればいい―俺で―同じ罪人の俺で良かったら君と一緒に、罪を償うよ―そう結城丈二が―復讐を乗り越えて贖罪と人々を守る為に自ら命を捨て、その後も贖罪と人々を守る為に戦い続けている先輩が言ってくれた。

―君は家族を失い、兄弟同然の男を自らの手で殺した―辛かっただろう、苦しかっただろう、悲しかっただろう―だが、いやだからこ

そ君は君の身体にプライドを―君の命に、生き方に誇りを持って、誰かの為に仮面ライダーとして戦い続ける―君のご両親や秋月信彦、そしてクライシス帝国の人々の為にも、だ―

そう風見志郎が―家族を悪に殺され、一度は復讐を誓って尚正義の為に誇りを抱いて悪に立ち向かい続けた先輩がそう言ってくれた。

―俺の身体も君の身体も望んだ訳でもない、忌々しく、呪わしい、血塗れの醜い代物だ―だけど、それでも俺も、君も、今生きている人達の命や未来、そして笑顔を守る事は出来る、守る権利がある、守りたいと思っていと俺は信じてる―君もそう信じるなら、俺は付き合うぜ―最後の最後まで、そして死んだ後も付き合う地獄への道連れとして、な―

そう一文字隼人が―人間の尊厳を奪われた怒りと憎しみ、そして悲しみを仮面に隠し人々の笑顔を守る為に生き続けてきた先輩が言ってくれた。

―南光太郎君、俺も―俺達も君と同じだ―人類の自由と平和を守ろうと思ひ、戦って―大切なものを失い―同類を手に掛け―多くの人々を救えなかった―俺達は強くなかった―それでも俺達は―俺は守ろうと、助けようと、その為に戦い、生き続けようと思ひ、そうしよう―強くなりたいと思ひてきた―俺は、強くはない。だが強くありたいと思ひ続けてきた―もし君が秋月信彦の、クライシス帝国の人々の為にも強くありたいと思ひなら―俺が、俺達が君を支え、助け、寄り添ひ、共に戦おう―そして、俺で良ければ君に生き方を、生きる道を―『仮面ライダー』として生き続ける道を、君に示そう―かつて俺が、9人の男達にそうしたように―

そう本郷猛が―最初に人類の自由と平和を守る為に独り戦い続ける

事を決意し、『仮面ライダー』という生き方を率先して皆に示し、歩み続けてきた先輩がそう言ってくれた。

だから俺も改めて先輩達のように――『仮面ライダー』として生き続けようと決意した。生き続けたいと願った。先輩達には及ばずながらせめて魂だけは先輩達と同じ『仮面ライダー』でありたいと思った。

――先輩方――ありがとうございます――そして――宜しく――お願いします――す！

――行こうか、光太郎君――いや、光太郎。君――お前を――11番目の仮面ライダーを、その助けを求めて、待っている人達はこの世界には沢山いる――だから、立ち止まらずに――行くぞ

――はい！！

そしてそれ以来俺――南光太郎は信彦やクライシス帝国の人々の為に改めて『仮面ライダー』として生き続けようと誓った。

そんな事を考えている内に『富士演習場』の正門前へと到着し、駐輪場へとバイクを停める。

「遅い！10分遅刻よ！」

そこにカメラを持った女性が光太郎に声を掛けてくる。

「ハハハ…ごめんごめん、後ろの人乗っけちゃったからちょっと遅

くなっちゃって…久しぶり、玲ちゃん。昔と全然変わってないね」

「もう！ 誉めても何も出ないわよ？ …光太郎さんこそ、あの時のままね」

「あら、女の子待たせてたの？ だったそう言ってくれたら良かったのに…」

苦笑しながら女性に謝りながらも再会を喜び合う光太郎と女性を見てルリ子が光太郎を冗談混じりに咎める。

そして女性はルリ子に向き直り一礼すると続ける。

「お久しぶりです、緑川ルリ子博士。今回は取材協力までして頂いてありがとうございます」

「いいのよ、玲子ちゃん。前に裸の付き合いをした仲じゃない」

「あれ、玲ちゃん…ルリ子さんと知り合いだったの？」

「ええ。ドイツの『バーデン・バーデン』でたまたま一緒に温泉に入って以来何かと懇意にさせてもらってるの」

そう言って女性…白鳥玲子は光太郎とルリ子に笑いかけてみせる。玲子はカメラマンであり、かつて光太郎の仲間として共にクライシス帝国と戦った戦友だ。

そして光太郎は玲子に協力を要請し、更識姉妹を取材する玲子の助手という形で『富士演習場』に入る手筈になっている。

本来IS学園の生徒である更識姉妹を取材するには担任や付き添いの教員の許可が必要なのだが、今回は付き添いの緑川ルリ子にその判断が一任されていた為、ルリ子と旧知の仲である玲子はルリ子に事情を話した上で協力を求め、ルリ子はこれを快諾した。

とはいえこうして玲子と会うまでは光太郎が玲子に協力を求めた男であるとルリ子は知らなかったが。

「それより光太郎さん、はい荷物」

「え？ちよつと…」

「遅刻した罰よ？」

「そうそう。久しぶりに会う女の子を待たせるなんて重罪よ…と言う訳で私の分もお願いね？」

「ルリ子さんも！？…まあ、いつか」

そして自分に荷物を押し付け並んで歩き出した玲子とルリ子に苦笑しながら、光太郎もまたそれに続けて荷物を抱えて歩き始めた。

『富士演習場』IS用アリーナにあるIS格納ハンガー内でこの後模擬戦を行う『霧纏の淑女』と『打鉄式式』の最終調整が行われていた。

「簪さん、『打鉄式式』の改良型照準システムの調整は終了しました。一応今度はマニュアル操作で発射してもシステム上問題ない筈ですが、極力『山嵐』の使用は控えて下さい。あれは完成型『マルチロックオン・システム』での使用が前提となっていますので」

「…ありがとうございます、茂兄さ…」

「…ここでは『佐原室長』をお願いします」

「…失礼しました、佐原室長」

『打鉄式式』の前で更識簪と佐原室長こと佐原茂が作業を終えて照準システムについて話していた。

茂も妹のひとみも公私の区別ははっきりと付ける為、茂はハンガーに入ってから楯無や簪に対しても敬語で接しているし、『室長』と呼ばせている。

今二人が話しているのは『打鉄式式』に搭載されている独立稼働型ミサイルを発射するミサイルポッド『山嵐』の事だ。

『山嵐』は本来は第3世代技術の『マルチロックオン・システム』によりミサイルを発射するのだが、肝心の『マルチロックオン・システム』が完成しておらず、現在では通常の照準システムが使用されている。

しかし簪は先日 of 無人 I S 襲撃事件においてマニュアル操作でミサイルを一発一発誘導するという荒技を披露した。

だが本来想定されていないマニュアル操作での『山嵐』使用により照準システムに強い負荷がかかり、回路が焼き切れる一歩手前であると整備中に判明した為急遽開発元の『倉持技研』へと送られた。

そして茂により未完成の『マルチロックオン・システム』の開発データをフィードバックし、マニュアル操作による『山嵐』使用にも対応した改良型の照準システムが搭載され、調整が施されている。

とはいえやはり『山嵐』を問題なく使用する為にはやはり『マルチロックオン・システム』の完成・搭載が急務であり、今回搭載した照準システムもあくまで『繋ぎ』に過ぎない。

ちなみに『マルチロックオン・システム』の開発が遅れているのは技術的課題が多いのもあるが、やはり何かと手がかかり、後付装備の開発が難航している『白式』に人員が割かれているのが大きい。

そんな事を考えながら二人を眺めていた更識楯無に声が掛けられる。

「楯無、『霧纏の淑女』の調整は終わったわ。ちょっと實際着て確かめて頂戴」

「ありがとうございます、佐原先生」

そうやって楯無は佐原ひとみに礼を述べ『霧纏の淑女』を装着してみる。特に問題は無さそうだ。

「大丈夫です、佐原先生」

「そう、良かったわ：虚、本年、次は『打鉄式』の方よ」

「はい！」

そうやってひとみは作業を手伝わせていた布仏虚・本音姉妹を引き連れて『打鉄式』の前にいる茂と簪に話し掛ける。

「佐原室長、後は我々で作業しますので…」

「お願いします、佐原先生：それとこちらが『打鉄式』の仕様書の修正箇所です。宜しければ参考にして下さい」

「お手数をおかけします。是非使わせて貰いますね」

それだけ会話を済ませると今度はひとみと虚と本音が作業に移り、茂と簪は楯無のいる搭乗者の待機スペースへと歩いてくる。

「お疲れ様です、佐原室長」

「なに、これも仕事ですから」

労をねぎらう楯無に対して茂は笑って答える。

「…お姉ちゃん」

「なに、簪ちゃん？」

そこに簪が楯無に声をかける。

「いつも思うんだけど…ここまで行くと凄いな…茂兄さんとひとみ姉さん」

「…そうね、一夏君にも見習わせたいくらいね」

そう言って楯無は笑う。

茂とひとみは原則仕事中は私情を持ち込まない為普段とはうって変わって互いに礼儀正しく応対する。

その点では公私の区別は佐原兄妹並にきっちりつける担任教師の織斑千冬に対しても時折つい『千冬姉』と呼んでしまう織斑一夏に見習わせた方がいいのかも知れない。

だが、楯無は背中に寒気を感じて思考を中断する。不味い。本能的に危険を察知し動くこうとするが、既に相手の間合いだ。諦めるしかない。簪も同じ考えらしく顔が青ざめている。

そして、それは呵責なく二人の背後から襲い掛かってきた。

「一日ぶりね！簪ちゃん！うーん、相変わらずいい匂い！」

「ル、ルリ子先生…やめて下さい…」

「いいじゃない！減るもんじゃなし！」

簪の背後から白衣姿に眼鏡を掛けた女性…緑川ルリ子が簪に抱きつくや、そのまま抱き寄せてニコニコしながら『クンかクンか』し始めた。

楯無と簪が察知した寒気の正体は他でもないこの緑川ルリ子である。

ルリ子は一見すると眼鏡を掛けた知的な美人であり、またその経歴から校医として赴任してきた直後は皆から敬遠されがちであったが、現在ではその腕の良さと学会の権威とは思えぬ程の明るく陽気でフランクな性格もあって生徒達からはかなり人気があり、『ルリ子先生』として親しまれている。

反面その温厚さと親しみ易さから『学園内の良心』と呼ばれる用務員の轡木十蔵、その知性や学識、経歴から『学園最高の理性』として教員からも一目置かれる同じ校医の海棠肇と共に、その自由奔放さから『学園最自由』^{アンチエイン}などと呼称され、一部生徒や教員達からは恐れられている。

そのフリーダムさの最たるものは教員の身でありながら「面白そう」という理由で楯無が企画した『クラブ対抗一夏争奪戦』に名乗りを上げ、「ゲットしたらとりあえずペットにでもする」と宣言した事であろう。楯無やひとみ、千冬の必死の努力と肇の制止により何とか参加は阻止されたが。

更にルリ子には気に入った相手を『必ず』ハグする癖があり、簪も会う度会う度ハグされている。ちなみに教員も例外ではなく、山田真耶もいつもルリ子の餌食になっている。

そしてそれは『学園最強』の楯無であっても例外たり得ない。

簪に足止めされている隙に逃げようとした楯無の背後に一瞬で音もなく回り込むや、ルリ子は簪と同じようにハグする。

「私から逃げようたってそうはいかないわよ？楯無ちゃんも楯無

ちゃんで捨て難いわねえ」

そしてやはり簪と同じ要領でルリ子は楯無を『クンかクンか』し始める。

「そこまでにしてあげてくれませんか？ 緑川博士」

そこに助け船を出したカメラマン…白鳥玲子はこの時の二人にとっては救いの女神に見えた事であろう。

「「玲子さん！」」

渋々ルリ子が楯無を解放すると楯無、簪に加えて茂も声を上げる。

「久しぶり、茂君。中々男前になったじゃない…それと楯無さんと簪さんもお久しぶり。その様子じゃ元気そうね」

そう言って玲子は笑ってみせる。

玲子は主にIS関連の取材をしているカメラマンだ。腕の方は折り紙付きで、『インフィニット・ストライプス』など様々なIS関連雑誌が彼女の写真を毎回掲載するくらいの売れっ子だ。

楯無も簪も以前から何回も彼女の取材を受けた事もあり、ある程度互いに勝手知ったる仲だ。今回も二人を取材させて欲しいと楯無に申し入れがあった際にはあっさりと承諾した。

そして茂とひとみとはクライシス帝国の出現以前の付き合いで、的場響子や霞のジョーとは共にクライシス帝国と戦った戦友同士であると聞いている。

そこにハンガー内にいた響子とジョー、そして作業を終えたひとみも駆け寄ってくる。

「驚いたぜ、まさか取材のカメラマンが玲子ちゃんだったなんてな！」

「見た目からして昔のままだし、相変わらず元気そうね、ジョー。そして響子ちゃんは綺麗になったわね」

「ありがとうございます、玲子さん！玲子さんこそ昔と変わってませんね？」

「本当ですよ！最初は私だってビックリしたんですから」

「そんなお世辞を言っても何も出ないわよ？」

そして顔見知り同士が再会を喜び合うが、ふと気付いたように玲子が言う。

「そうだ！今回はみんなもよく知ってる人が来てるのよ…入っているわよ！」

そこに一人の青年が入ってくる。白いジャケットに白いズボンを履いている。顔立ちも整っており背も高い。そして青年は朗らかな笑顔で告げる。

「みんな…久しぶり！」

それを見ると皆が一瞬沈黙するがやがて驚愕と喜びを込めて叫ぶ。

「兄貴!？」

「「光太郎さん（お兄ちゃん）!？」」」

そして青年を取り囲み抱きついたり肩を抱き合ったりと何だりと蜂の巣をつついたような大騒ぎになる。

「大きくなったね! 茂君! そしてひとみちゃんと響子ちゃんは…綺麗になったね!」

「光太郎さんは…あの時と全然変わってないね!」

「ジョー! お前も元気そうで良かった!」

「兄貴こそ! また会えて嬉しいぜ!」

そうやって再会を喜び合っていた皆だが、ルリ子が咳払いすると一旦皆離れて玲子が口を開く。

「ごめんなさいね、二人とも…改めて紹介するわ。この人は今回私の助手を務める…」

「南光太郎です! 宜しくお願いします!」

そう言って青年…南光太郎は爽やかに一礼する。

そして光太郎は簪に歩み寄るや笑顔で語り掛ける。

「更識簪さん、ですよ? 玲ちゃんから話は聞いてました。今日は

宜しく願いますね？」

そう言って手を差し出す。

「はい…宜しく願います」

それにつられて簪も思わず手を出すと光太郎はそれを握り、力強く握手をする。

光太郎は簪の手を放すと今度は楯無へと歩み寄る。

「なら貴女は簪さんのお姉さんの楯無さんですね？今回は宜しく願います」

「え、ええ…こちらこそ」

「あの、何か不味い事言いましたか？」

面食らったように苦笑する楯無を見て光太郎が尋ねる。

「いえ、そんな風に言われたのは初めてでしたから…」

ロシアの国家代表操縦者でありIS学園生徒会長の楯無を簪の『ついで』扱いたしたのは光太郎くらいだ。

それに気付いた玲子が苦笑しながら光太郎を咎める。

「勉強不足ね？光太郎さん…見ての通りISの事は全然詳しくないから別に悪気があった訳じゃないの…だから許してあげてくれないかしら？」

「いいえ、気にしていませんから…簪ちゃんの『ついで』ですが宜しく願いますね？光太郎さん」

「中々手厳しいな…改めて、こちらこそ」

からかうように笑いながら手を差し出す楯無に苦笑しながらも光太郎は握手を済ませる。

「それじゃ、立ち話も何だし別の場所で話しましょ？まだ時間もあるし」

そう玲子が言うのと更にカオスさが増した一同は連れ立って格納ハンガーを出た。

アリーナにある控え室らしき場所で南光太郎と更識簪は話していた。

「…つまり簪さんはその織斑一夏君に理想のヒーロー像を見たって事かい？」

「はい…おかしいですか？」

「いや、そんな事はないと思うよ？その一夏君は君の話を聞いた限りじゃむしろ当然だよ」

先程から更識楯無を取材している白鳥玲子の横で、光太郎と簪はヒーローの話から学園での話まで色々な事を話し込んでいた。

元々佐原茂やひとみ、的場響子から話を聞いていた事に加え、話に違わぬ明るく陽気で気さくな好青年である光太郎の人柄もあって二人は割とあっさり打ち解けていた。

今は主に想い人である織斑一夏の話簪は光太郎としている。さしもの光太郎も簪が語る一夏の常軌を逸した鈍感さに絶句する場面もあったが。

「それにきっかけが何であれ君の為に動いて、命すら懸けてくれたんだ…彼は間違いなく『理想のヒーロー』だよ」

そう言って光太郎は簪に快活に笑ってみせる。

逆に簪は光太郎から大学時代の話をよく聞いていた。

「光太郎さん…サッカーやってたんですね…」

「ああ！これでも1年生でレギュラー取ってたんだよ？信彦と…いや、何でもない」

本当はクライシス帝国の話を知りたかとも思っていたが、今の所向こうも話す気は無さそうなので止めておいた。

ふと簪は光太郎の話を聞いていて疑問に思う事があったので尋ねて

みた。

「あの、光太郎さん…時々お話に出てくる『信彦』さんって…誰ですか…？」

光太郎は少し間を置いてから答える。

「…同じ日に生まれて、同じ家で育って、同じ時間を過ごした…簪さんにとっての楯無さんみたいなたった一人の兄弟みたいなヤツ、かな」

「兄弟みたい…ですか？」

「ああ。一緒に笑って、一緒に泣いて、時々喧嘩して…でも最後には仲直りして。俺と信彦はいつもそんな感じだった。俺達は良きライバルで、最高の親友で…血は繋がって無かったけど、兄弟みたいなものだった」

そう語る光太郎の目はどこか懐かしむような、誇らしいような…そんな目をしていた。

「…少し、羨ましいです」

「どうしてだい？」

「…私、光太郎さんと違って、血が繋がってるお姉ちゃんの事、そんな風に思う所か勝手に恨んだり、妬んだりしてましたから…」

簪は今まで優秀な姉と比較され続けてきた。故にその事がコンプレックスとなり、姉に対して嫉妬や羨望などが入り交じった複雑な感

情を抱いていた。

無人IS襲撃の際に姉に庇われた事をきっかけにそうした感情は氷解し姉との関係は改善されたが、今度はそれまで自分を大切に思ってくれていた姉にそんな感情を抱いていた事が簪の中では負い目として残っていた。

だからそんな嫉妬や羨望もなく純粹に信彦という兄弟同然の男を大切に思っ、そう思っていた光太郎が簪には羨ましかった。

「…いいんじゃないかな、そんな事考えても」

しかし光太郎はどこか優しく笑って続ける。

「誰だってそんな事を考える事だってある。勿論俺にだってあったさ…多分、信彦にも」

「けど簪さんはそれに気付けて、変わった…楯無さんの気持ちに氣付けて、変わったんだ」

「だから、そんなに自分を責めなくてもいいんだよ。大切なのは、昔君が楯無さんをどう思ってたかじゃなくて、今君が楯無さんをどう思ってるかなんだから」

「それに、君と楯無さんにはまだ未来が…これから先、やり直せるチャンスがあるんだ。だから、これから昔の分まで楯無さんの事を大切にしていけばいい。そうする権利が簪さんにはきつと、あるよ」

「それに」

そこに楯無が割り込んでくる。

「簪ちゃんのそんな所もひっくりくるめて私の自慢の妹だから：気にしないで？ 例え他の誰が何と言おうと私にとって簪ちゃんは大切な、たった一人の血の繋がった妹なんだから」

「光太郎さん：お姉ちゃん：」

「それに響子ちゃんや茂君、ひとみちゃんも君が楯無さんにとって大切な、たった一人の血の繋がった妹だって認めてるんだ：だから楯無さんや響子ちゃん、茂君、ひとみちゃんの為にも、胸を張って：ね？」

そう光太郎は笑ってみせる。時計を見るとそろそろ時間だ。

そこで光太郎達は話を打ち切り、準備を始めた。

模擬戦を間近に控えた管制塔内ではスタッフ達が模擬戦開始に向けて各種準備に取り掛かっていた。

「保護用シールドバリア以上無し！」

「隔壁動作チェック完了！」

「『霧纏の淑女』並びに『打鉄式』の最終チェックも終了したとの報告が入っています！」

「現段階で特に異常無し！予定通り30分後には模擬戦を開始可能です！」

きびきびとオペレーター達の方が飛び交う中、白衣を着た女性は少し離れた場所で椅子に座り端末を操作している。

そこに管制塔のドアが開きスーツ姿の女性が入ってくると白衣を着た女性に声を掛ける。

「準備の方はどうかしら？秋月開発局長」

「今のところ問題ありません、紀田専務」

「そう、ご苦労様…それとこの先はいつも通りでいいわよ？杏子ちゃん」

「ありがとうございます、克美さん」

そう言って二人：秋月杏子と紀田克美は顔を見合せ笑い合う。

杏子と克美は古い知り合いだ。杏子の兄、信彦と克美は恋人同士であった。だが信彦はゴルゴムにより拉致され、改造人間『シャドームーン』にされてしまった。

そして杏子と克美は信彦と兄弟同然に育ち、同じくゴルゴムにより

『ブラックサン』に改造されてしまった南光太郎と共にゴルゴムとの戦いに身を投じた。

だが、光太郎がシャドームーンと戦う事を決意した際に二人は日本から逃げるように光太郎に言われた。そして光太郎がシャドームーンに敗れ、ゴルゴムによる総攻撃が始まる中、二人は失意のまま海外へと渡り、光太郎が生きていると知った後も光太郎の邪魔にならぬ様にと海外で戦いの推移を見守る事を決め、それ以来光太郎とは会っていない。

その後アメリカの地で生活していた杏子と克美だが、ある時杏子はふとした偶然から緑川ルリ子博士の知己を得て、懇意となった。

そして杏子はそのルリ子の紹介で彼女の友人で機械工学の世界的権威でもある光明寺ミツ子博士と出会い、その弟子となりスイスへと渡った。

ミツ子の熱心な指導を受けた杏子は急速にその才能を開花させ、若くして新進気鋭の機械工学者として学会にその名を轟かせるようになった。

『アラスカ条約』が締結されるとルリ子に誘われミツ子と共に国際IS委員会の創設メンバーの一人として設立に関与した。

設立後は国際IS委員会を去り、半官半民のIS開発企業『倉持技研』の設立に携わり、それまでISと言えば専用機しか無かった時期に世界初の量産型IS『刃鉄^{はかね}』を設計・開発するなど多大な功績を残した。

現在では『倉持技研』の開発局長として開発チームを総括する傍ら

後進の育成も積極的に行っており、指導した『弟子』の中には『刃鉄』の後継機種『打鉄』及び『打鉄式式』の設計者である佐原茂も含まれている。

一方、スイスに渡った杏子と別れる形でアメリカに残っていた克美は経営コンサルタント会社に勤務していたが、ある時大学時代の友人で当時国防軍少佐だった倉持明美と再会し、請われて倉持を社長とする半官半民のIS開発企業『倉持技研』の設立の中心人物の一人となり、当時高名な機械工学者となっていた杏子を技術者として招聘した。

現在では専務の一人として社長の倉持を支えている他、杏子の直属の上司としても仕事をしている。こうやって『打鉄式式』の模擬戦を見に来たのもその一環だ。

「そう言えば杏子ちゃん、誰かが名刺置いてったって言ってたわよね？」

「はい、確か：IS装備開発企業『みつるぎ』の渉外担当の巻紙礼子さん、ですね」

そう言って杏子は先程自分の下を訪れた女性が置いていった名刺を克美に渡す。

「…『みつるぎ』：聞いた事が無い会社名ね」

「私もそう思ったんですけど：何でもつい最近出来たばかりの会社らしいです。けど…」

「…杏子ちゃんも納得がいかない？」

「ええ。何となく、ですけど」

暫く黙って考え込んでいた杏子と克美だが、間もなく模擬戦が開始されるというアナウンスがなされるやそこで思考を打ち切り、モニターの映像に視線を向けた。

間もなく『霧纏の淑女』と『打鉄式』の模擬戦が開始されるアーナの観覧席に更識家の関係者、そして白鳥玲子と南光太郎が座っていた。

「なあ、のほほんちゃん、どっちが勝つと思う？」

「順当に考えれば『霧纏の淑女』でしょうね」

「けどよ、世の中万が一ってのがあっても知れないぜ？」

「ならジョーさんはかんちゃんが勝つと思ってるんですか？」

「いや、そこまでは言っただけだよ」

「じゃあジョーさんは『打鉄式』が勝つ方に賭けるということだ

「負けたら今日の晩御飯はジョーさんの奢りで」

「待て！俺はそんな話聞いてないぞ！」

「でも今話したじゃないですか」

「何だよその理屈は！？」

光太郎の横で霞のジョーと布仏本音がそんなやり取りをしている傍ら、玲子と佐原ひとみも席で話していた。

「いいの？ひとみちゃん、格納ハンガーにいらなくて」

「この後の模擬戦はありませんし…二人共私の家族ですから。それに…『三度目の正直』にしたいですし」

「二度ある事は三度ある、はご免よね…」

そう言って玲子とひとみは溜息をつく。

実は玲子とひとみにはこの『富士演習場』に纏わるあるジンクスがある。それは『玲子とひとみが同時にIS用アリーナにいらると何かしら重大なトラブルが発生する』というものだ。

そして玲子とひとみがどちらもこのアリーナに居た事が二度あったが、いずれも重大なトラブルが発生している。

一度目は日独模擬戦の際に発生した『VTシステム』が禁止されるきっかけとなった試作型VTシステム搭載機『赤鉄』の暴走事故、二度目は日仏合同訓練の際に発生したデュノア社所属ISの墜落事

故だ。

どちらも死者こそ出ていないが、暴走事故ではアリーナに甚大な被害が発生し、墜落事故では年若い操縦者が重傷を負うなど大きなトラブルとなったものばかりだ。

そこでひとみは今までと違い格納ハンガーではなくいつそ玲子の隣で座っていれば却って大丈夫なんじゃないか、と思い観覧席に座っている。

そんな事情があるとは露知らず光太郎は近くに座っている佐原茂と的場響子に話し掛ける。

「茂君と響子ちゃんとしてはどっちが勝つと思う？」

「難しいなあ…だって『打鉄式』は俺が設計したんだから簪が負けるなんて言えないし」

「なら私は『霧纏の淑女』の開発に協力したんだから楯無さんが負けるなんて言えないわ」

「二人共…けど順当に行けばやはり『霧纏の淑女』ではないでしょうか？」

そこに苦笑しながら布仏虚が二人に代わって光太郎に答える。

「おっ、始まるみたいだね」

光太郎がそう言った直後に模擬戦開始の合図がなされ、『霧纏の淑女』と『打鉄式』は同時に動き出した。

先に仕掛けたのは更識簪の『打鉄式』の方であった。

簪は背中に搭載された二門の連射型荷電粒子砲『春嵐』の砲口を更識楯無が装着する『霧纏の淑女』へと向ける。

「先手…必勝！」

そしてそのまま楯無へと荷電粒子砲を連射する。

しかし楯無はそれを軽やかに全弾躲すとお返しとばかりに手に持ったランス『蒼流旋』を簪に向け、ガトリングガンを発射する。

「そう…簡単には！」

しかし簪もまたスラスターを噴かして銃撃を回避し、そのまま対複合装甲用超振動薙刀『夢現』を呼び出し構えると、そのまま楯無へと斬りかかる。そして『蒼流旋』を構えた楯無と激しく打ち合う。

「中々やるわね、簪ちゃん。けど…！」

しかし楯無は簪の攻撃を捌き切ると一転してランスで攻め立てる。

それを辛うじて『夢現』で防ぐ簪だが、緩急織り交ぜた変幻自在な楯無の攻撃の前にシールドが削られていく。

「どうしたの？さっきのでおしまい？」

「勿論…まだ終わりじゃ…ない！」

簪は即座に『春嵐』を呼び出すと至近距離からの速射を楯無へと浴びせる。

さしもの楯無も堪らず後退するが『アクア・クリスタル』を展開するとナノマシンを操作して水のヴェールを作り出し、『春嵐』を防ぎ切る。

そして楯無は蛇腹剣『ラストイー・ネイル』を取り出すと高圧水流を発射しながら鞭のようにしならせ簪を攻撃する。

その攻撃を何とか回避し、凌ぎ切る簪だが、そこに楯無がランスを構えて突撃する。

「…ぐう…！」

とっさに薙刀で防御する簪だが、体勢を崩された事もあり防戦一方だ。

更に楯無は『アクア・クリスタル』から水を霧状に散布し始める。そして簪の周囲が十分な量の霧に覆われたと見るやナノマシンを発熱させ『清き熱情』クリア・パッションを発動させようと…

「そうは…させない！」

しかしその隙を突き簪はスラスターを逆噴射して距離を取りながら『山嵐』を展開しロックしないで一斉に発射する。

そして発熱したナノマシンや楯無に当たるとミサイルが爆発し、楯無は爆炎と煙に包まれる。

だが簪は油断せずに薙刀を構え、PICを駆使して再びスラスターを噴かして煙の中にいるであろう楯無へと突撃する。

そして煙の中に居た楯無に向かって思い切り薙刀で斬り付ける。だが当たった筈なのに手応えはなく、楯無の像は歪んで消え去る。よく見ると周囲には霧が立ちこめている。

「蜃気楼!？」

「ご名答。けど分かった時にはもう遅いってヤツね」

驚愕の声を上げる簪の背後から楯無のいつものような飄々とした声が聞こえてくる。

そして簪がハイパーセンサーを使って指を鳴らす動作をする楯無の姿を捉えると同時に『清き熱情』が発動し、逆に簪を巻き込む爆発が起こる。

「強くなったわね、簪ちゃん…さっきのでやられなかったのは正直予想外だったわ」

辛うじて爆発から逃れて楯無から距離を取った簪を見て楯無がいつ

ものの調子で語り掛ける。

（強い…私とは…格が…違う…！）

そして簪は改めて楯無との実力差と楯無の底知れなさを思い知った。

こちらは最初から全力を出しているのに楯無は明らかに全力は出してはいない。しかも今までが本気に対してどれくらいの割合で戦ってきたのが全く読み切れない。

優秀な姉と思いコンプレックスこそ持っていたが、まともにIS戦で立ち合うのは今回が初めてだ。或いは姉に勝てるかも知れないと今までは心の何処かで思っていたが、少なくとも現段階では勝ち目など無いに等しい。

実力が、経験が、判断力が、格が…全てが自分とは違い過ぎる。それこそ嫉妬も劣等感も湧かないくらいに、だ。

（けど…まだ…簡単には…やられない…！）

しかし簪は諦めずに頭をフル回転させ打開策を見いだそうとする。勝てぬまでも相打ち…せめて一太刀入れる方法ならまだある筈だ。ただではやられない。

「けどこれなら…！」

そして楯無が『アクア・クリスタル』を展開した瞬間、大量の水が溢れだし…楯無を包み込む。

簪は最初は何があるかと身構えるがやがて違和感に気付く。おかし

い。先程から水は楯無を包み込んだままこちらを攻撃する気配がない。何より水に包み込まれる瞬間楯無は一瞬驚いたような表情を…するとハイパーセンサーが簪に楯無の異変を知らせる。

「『コア・ネットワーク』が遮断された！？お姉ちゃん！？」

『コア・ネットワーク』が遮断されこちらからの通信が遮断されたとハイパーセンサーは告げていた。尋常な事態ではない。そんな事は普通ではあり得ない。

驚愕のあまり呆然としている簪を余所に楯無を包み込んでいた水が消え、その中身が姿を現す。

そこには楯無は居なかった。他のISに比べて装甲の割合が少ない筈の『霧纏の淑女』だが、その姿は大きく異なっていた。

全身が水色の装甲に覆われ、その顔面もプレートアーマーの兜のようになっている『全身装甲^{フルスキン}』だ。

ISは『形態移行』でその姿を大きく変える事はあるが『全身装甲』なる事はない。つまり今簪の目の前で発生している事は本来ならばあり得ない事だ。

…いや、一つだけ心当たりがあった。かつてIS学園でもドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒの専用機が同じ現象を起こしていた。そしてそれを引き起こしたのは…

「VT…システム…？」

簪がそう呟いた直後、先程とは比べものにならない規模の『清き熱情』による爆発が簪を包み込んだ。

目の前の異常事態の発生に観覧席が騒めく中、先程とは一変して一方的に『打鉄式』を打ちのめす『霧纏の淑女』の姿を見て一人の女がほくそ笑んでいた。

「いい様だねえ…自分の妹を自分が望まないのに自分の手で、自分の技を使って傷付けるなんてさぞいい気分だろうなあ…『学園最強』さんよ…!」

そして女は更識楯無を嘲るように呟く。

女は組織の命令でIS学園に潜入した際に楯無により翻弄され任務に失敗した過去を持つ。だからこそかつて煮え湯を飲まされた相手が苦しんでいるのが分かり嬉しさもひとしおだ。

「しかしまあ…『コアの戦闘記録を再現する』なんてよく思いついたもんだよ…」

同時に女は今日の前に起きている事を引き起こした原因である『装置』に感心したように続ける。

女が密かに格納ハンガーに入り込み『霧纏の淑女』に仕込んでおいた装置はかつてドイツでVTシステムを研究・開発していた研究者の一人が組織：『亡国機業』に加わりその援助を受けて開発したものだ。

その概要はモンド・グロッソ出場者の戦闘データを再現・実行する『VTシステム』を応用し、ISコアに蓄積された戦闘データを読み取りそれを再現・実行するというものだ。

勿論VTシステムの欠点である操縦者の意志を無視して自身が破壊されるか敵を全て排除するまで戦い続けるという点はそのままだ。と言うより意図的にそうしている。

このシステムが開発されたのは主に優秀ながら組織に反抗的なIS操縦者の反逆対策の為である。

勿論現在においても体内に監視用ナノマシンの注入等により対策が施されているが、貴重な戦力であるIS操縦者を簡単に殺せる程人材は多くはない。

その為反抗した場合はこの装置により操縦者の自由を奪い強制的に敵を殲滅させる為に開発が進められ、将来的には外部から装置を介してISをコントロール出来るようにする事も視野に入れている。

そして装置の試作型が完成したのだが、現在の所一度発動してしまふと装置の破壊以外で停止させる方法が無い為組織のISを使い実験する事は出来ない。

そこで女は意趣返しも兼ねて模擬戦を行うという『霧纏の淑女』に

装置を密かに搭載して起動実験を行う事を提案、承認された。

そして先程端末から起動コードを送った結果、装置の起動に成功し今に至る。

そして『霧纏の淑女』のコアには更識楯無の戦闘データが豊富に残っていたらしく、現在日本代表候補生が搭乗した『打鉄式』を圧倒している。

お陰で先程から笑いが止まらない。気分が最高にハイだ。

そんな女の横に男が一人腰掛け、話し掛ける。

「随分と機嫌がいいみたいです、巻紙礼子さん？ いや… 『亡国機業』の構成員『オータム』さん」

「!？」

女…オータムは思わず男を見て目を見開く。

「隠したって無駄だ…とつくに調べはついてるからな」

そしてもう一人別の男がオータムの背後から声を掛ける。慌ててオータムは飛び退くと声を荒げる。

「てめえら…何者だ!？」

「これは失礼…我々はこのいう者です」

そう言ってオータムの隣に座った男は立ち上がりもう一人と並び立

つと身分証を提示し、続ける。

「ICPO（国際刑事警察機構）捜査官の佐久間健です」

「同じく、滝竜介」

そして男：佐久間健に続きもう一人：滝竜介もICPO：インターポールの身分証をオータムに提示する。

「バカな！？何故インターポールが！？」

「まさかIS学園を襲撃した翌日にこっちにちよっかいを出すなどとは思わないだろう：と読んだんだろうが、残念だったな」

驚愕するオータムに対して竜介が冷たく言い放つ。

昨晚オータムは恋人で上司のスコール・ミューゼルと共にIS学園に秘匿されている未登録コアの奪取と織斑一夏拉致の為に学園へと潜入したのだが、インターポール捜査官の滝和也とベッドを軽々と持ち上げてぶん投げる怪力を持った髪の毛がモシャモシャした『化け物野郎』に妨害され、失敗している。

ISがあれば或いは成功したのかも知れないが、スコールもオータムも確実に潜入を成功させる為にISを持って行かなかったのが仇となった。

そして竜介の言った通りあれだけ学園で派手に暴れればインターポールの目もそちらに向いてこちらには注目しないだろうと踏んで作戦を結構したが、最後の最後でケチが付いてしまった。

「貴女には数多くの容疑で国際手配が掛けられている…残念ですが、貴女を此処で拘束させて貰います！」

「ハッ！やれるもんならやってみやがれてんだ！」

そしてオータムはナイフを取り出すと佐久間へと挑みかかった。た。

南光太郎達は目の前で繰り広げられている光景に絶句していた。

いきなり『霧纏の淑女』が『全身装甲』へと姿を変え、更識簪の必死の呼び掛けにも一切答えずに苛烈なまでの猛攻を続けている。そんな光景がいかに異常なものであるかはISに関しては素人の光太郎にだって分かる。

しかしかつて同じような異常を経験していた白鳥玲子と佐原ひとみはまだ冷静であった。

「まさか…VTシステム!？」

「あり得ないわ！それにあの動きはモンド・グロッソ出場者の誰でもない…他でもない楯無さんの動きそのものよ！」

しかしそれでも目の前の異常を説明する事までは出来なかった。

だが近くの観覧席でそれとはまた別の騒ぎが起きている事に光太郎は気が付く。

「こいつら……しつこい！」

何やらナイフを持った女がこちらへと走ってくる。そして二人の男がそれを追い掛けている。その内の一人は光太郎がよく知る人物であった。

「滝竜介……先輩!？」

「……南光太郎か!？ 丁度いい! 彼女が『亡国機業』の構成員『オータム』だ！」

男……滝竜介も光太郎に気付くと声を上げる。

「クッ! だったら……！」

すると女……オータムは手近にいた少女……布仏本音を人質にしようと飛び掛かる。

「おっと! この霞のジョー様の前でそんな真似はさせないぜ！」

しかし本音を庇うように霞のジョーが前に出てオータムのナイフを叩き落とし、逆にオータムを投げ飛ばす。

「大丈夫かい? のほほんちゃん」

「ありがとうございます〜でも賭けは取り消し無しですよ〜？」

「はいはい…危ない所だったってのにマイペースで何よりだよ」

肝が相当太いのか相変わらずのほほんとしている本音に呆れながらもジョーはオータムに挑みかかる。

「クッ！てめえらまで邪魔しようってのか！？」

「当たり前じゃない！」

「お前を野放しにしておく訳にはいかないからな！」

オータムに対して玲子と光太郎が連携して突きや蹴りで追撃を入れる。

「俺も忘れるな！」

「今度という今度は…！」

「…逃がしはしない！」

そこにジョー、竜介、佐久間健が加わりオータムを一方的に攻め立てる。

「この！クソったれが！」

怒り狂うオータムは飛び退いて距離を取り投げナイフを投擲するが光太郎とジョーに悉く叩き落とされる。そしてお返しとばかりに光

太郎は備え付けのベンチを無理矢理外しオータムへと投げ付ける。

それを躲したオータムは光太郎を睨み付ける。

「てめえ…あの『化け物野郎』みたいな事しやがって！人間相手に使う気は無かったがあの『化け物野郎』の同類ってんなら話は別だ！此処で落とし前付けてやるよ！！」

そしてオータムはアメリカから強奪した第2世代IS『アラクネ』を装着する。一度自爆し、コアを新たな装甲を馴染ませるのに時間がかかっていた為今まで使えなかったが、先日やっと使えるようになった。

「クソ！ISか！」

「なら俺達も手加減無しで行かせて貰うぜ！」

そしてジョーは釵を手を持ち、光太郎は素手でオータムに挑みかかる。

「そんなに早く死にてえか！」

それを嘲るようにオータムは背中に展開された蜘蛛に似た八本の足をジョーと光太郎に突き出す。

「そう簡単に！」

「やられるかよ！」

しかし光太郎とジョーはそれをいなして逆に飛び蹴りを放ち、オー

タムをひるませる。

「響子ちゃん！」

「はい！」

更に玲子が的場響子に響子が持ち込んでいたアーチェリー用の弓と矢を投げ渡すと響子は即座にそれを構えてオータムへと矢を放つ。

「光太郎！」

「お願いします！」

更に光太郎が投げ付けたベンチをサッカーボールのようにトラップして竜介にパスすると竜介はそれを受けて自慢の『リュウシュート』をオータムへとお見舞いしてやる。

「一つお借りしますよ！」

「どうぞ！食らえ蜘蛛野郎！霞のジョー様特製対IS用手投げ爆弾だ！」

続けて佐久間とジョーが手投げ弾をオータムに直撃させ、爆発が起ころる。

更に追撃に入ろうとした光太郎達だが、そこに保護用シールドを突き破り『打鉄式式』が突っ込み、近くに叩き付けられる。

「お姉ちゃん止めて！お願いだから返事をして！」

簪はそれでも立ち上がり楯無へと呼び掛けるが返事はない。そして『霧纏の淑女』はそんな簪を嘲笑うかのように大量の水を展開し始める。

「簪さん！」

「他人の心配より自分の心配したらどうだ！」

そこに体勢を立て直したオータムが砲門を光太郎へと向ける。

「やらせない！…水よ！」

それに気付いた響子が超能力で『霧纏の淑女』が展開していた水を根こそぎ引き剥がすとそのまま激流へと纏めてオータムへと直撃させ、押し流す。

「な、何だ！？一体何だってんだお前ら！？」

オータムは先程から自分に挑みかかる人間達の異様さに感付いていたが、いきなり響子が水を操って攻撃してくるという非常識な事態に完全に気が動転してしまった。

「クッ！目的は果たしたんだ…今は退くか…！」

そしてオータムは退却を決めスラスターを噴かし飛び上がるとそのままアリーナから離脱した。

それを啞然としながら見ていた虚と本音だが、ランスで一方的に叩きのめされている簪を見て我に返る。よく見ると『打鉄式』の装甲の一部がひしゃげている。シールド残量が危険域に入りつつある。

「お姉ちゃん！もう止めて！何で…何で…」

簪は抵抗すら出来ずに悲痛な叫びを上げる事しか出来なかった。先程からの異常事態を見ていれば当然だが。

しかし『霧纏の淑女』は構わずにランスで簪を滅多打ちにする。そしてトドメとばかりにランスに水を纏わせ突きを放とうとする。

— 信彦！

— 俺はお前と戦いたくない！

―戦いたくないんだ!!

その瞬間、光太郎は『霧纏の淑女』に飛び掛かりランスを押さえ込み、叫ぶ。

「やめるんだ! 楯無さん! どうして…どうして実の姉妹同士でこんな事をしなきゃならないんだ! ?」

そのまま『霧纏の淑女』を羽交い締めにするが、『霧纏の淑女』はスラスターを噴かして飛び上がると光太郎をアリーナの壁へと思い切り叩き付ける。

その衝撃に一瞬意識が飛ぶ光太郎だが、構わずに簪の下へ行こうとする『霧纏の淑女』にしがみつき、止める。

「なぜだ! ? なぜこんな事になったんだ! ? 楯無さん! 君だってこんな事したくはないだろ! ?」

必死に光太郎は楯無に語り掛けるが『霧纏の淑女』はランスで光太

郎を撃ち据える。

「楯無さん、答えてくれ…こんな事…こんな事…こんな理不尽な事したくはないって、答えてくれ!!」

そう光太郎は叫ぶと再び立ち上がり簪の下へ向かおうとする『霧纏の淑女』を足止めすべく再び飛び掛かっていった。

「一体…何がどうなっているの…?」

先程から続く異常事態の連続に管制塔内は混乱しながらも必死に指示を出し続けていた。

秋月杏子と紀田克美も呆然と呟く事しか出来なかった。

「一体何がどうなっているの!?!」

そこに医務室に詰めていた緑川ルリ子が飛び込んでくる。

「ルリ子さん!それが私達にもよく分からなくて…!」

杏子がルリ子に答えた直後に更に団体が管制塔内へとなだれ込んで

くる。

「秋月局長！紀田専務！」

「佐原室長！それに：滝竜介さん！？」

「悪いが再会の挨拶は後回しだ！状況は！？」

飛び込んできたのは佐原茂と滝竜介、他にも何人かが一緒に入ってきている。本来なら部外者を立ち入らせるのは問題だが、今更そんな事を言っていられる状況ではない。

モニターに映る映像にはアリーナの様子が映っていた。観覧席の観客はとつくに避難が完了している。

そしてアリーナ内では『霧纏の淑女』が暴れていた。『打鉄式』はそれを止めようとしていたが、やがてそれすら出来ずに一方的に叩きのめされていた。

そこに男が：白い服を着た男が『打鉄式』を庇うように前に立ち、『霧纏の淑女』へと挑みかかる。しかし所詮は生身の人間、ISに勝てる筈もなくあっさり弾き飛ばされる。

しかし男は何度も立ち上がり『霧纏の淑女』へと挑みかかる。身体から血を流し、服がボロボロになっても『霧纏の淑女』へと挑みかかっていた。

その男を見て杏子と克美は驚愕する。なぜならばその男は：

「「光太郎さん！？」」

南光太郎であった。

「秋月局長、紀田専務…光太郎さんを…ご存知なんですか？」

そこに茂や竜介と共に管制塔内に入ってきたカメラマン…白鳥玲子
が杏子と克美に尋ねる。

「知ってるも何も彼女達は南光太郎と一緒に育った秋月信彦の妹と
…恋人だ」

代わりに竜介が玲子に答える。

「それより光太郎お兄ちゃんが！」

「光太郎さん！」

「兄貴！」

そして画面を見ていた佐原ひとみ、的場響子、霞のジョーが叫ぶ。

画面の中では、更識簪を庇いガトリングガンの掃射を受けて血を流
す南光太郎の姿が映っていた。

「何で…何で…？」

更識簪には南光太郎の行動が理解出来なかった。

生身で『霧纏の淑女』に戦いを挑んでいる事、いくらボロボロになっても何度も立ち上がっている事、何より先程出会って間もない…取材のついでに少し話したくらい自分を庇う為に自らガトリングガンの銃撃に身を曝した事が理解出来なかった。

「楯無さん…止めてくれ…簪さんを…これ以上…悲しませ…苦しませないでくれ…」

そしてそれを受けて尚光太郎は『霧纏の淑女』…いや更識楯無へと語り掛けるのを止めようとはしなかった。そして再び『霧纏の淑女』へと挑みかかっていく。

それを嘲笑うように『霧纏の淑女』はランスで光太郎を突き、打ち据え、再び簪の目の前へと吹き飛ばす。しかし光太郎はそれでも立ち上がる。

「頼む…楯無さん…答えてくれ…こんな事…こんな事…」

「答えて…どうなるのかしら？」

そこに『霧纏の淑女』から声が聞こえてくる。姉の楯無の声だ。

「お姉ちゃん!？」

簪は驚愕の声を上げるが楯無は光太郎に対して続ける。

「光太郎さん…私が貴方に…こんな事したくはないと…こんな事したくはないけど…私には止められないと…私にはどうしようもないと答えて…何になるのかしら…？」

楯無はいつも通りに振る舞おうとしていたがその声は何かを押し殺す様に震えていた。そんな楯無の声を、簪は聞いた事が無かった。

「楯無さん…」

「私だってこんな事したくないに…決まっているじゃない…けど私には止められない…もうどうしようもない…そんな事を…貴方が聞いて…何になるのよ…？」

「お姉ちゃん…」

そこで漸く簪は悟る。楯無は泣いていた。そして今まで独りで『霧纏の淑女』を止めようと必死に努力してきた事、それがいずれも無駄に終わり、望まぬままに簪を傷付け続けてきた事を悟った。

きつと昔の…そして今の自分よりずっと辛かっただろう、悲しかっただろう、苦しかっただろう。それでも楯無は姉として…そして更識家当主として泣き言一つ言わずに立ち向かっていた。だが、楯無とて『完全無欠のヒーロー』ではなく、人間だ。一人の少女だ。もう限界だったのだろう。だから光太郎に思いの丈を話した。

そして今度は楯無は簪へと語り掛ける。

「…そう言う訳よ、簪ちゃん。もう私では止められない。どうしよ

うもない。だから、更識家当主として貴女に命じます。私を…更識楯無を、討ちなさい」

「な、何を言っているの!？」

そして先程とは打って変わって冷静に楯無は言い放つ。その内容に動揺する簪に構わずに楯無は続ける。

「更識簪、貴女は更識家の人間なのよ? 『暗部殺し』として名を馳せた更識家の人間なのよ? …例え身内であろうと人々に害をなし得る者は始末するのが更識家の務め。そして私は貴女のみならず南光太郎に危害を加え、この後他の皆にも危害を加えるでしょう…ならば貴女が…更識家の一員である貴女が、私を止めなさい」

「嫌だよ…そんなの…嫌だよ!」

「…我が儘言わないで…簪ちゃん…」

必死に頭を振って拒否する簪をいつものような口調で、優しく嗜めるように…姉として楯無が続ける。

「これは…仕方のない事なの。だから悲しまないで、簪ちゃん。私の…私の力が足りなかったからなんだから」

「無理だよ…無理だよ…!」

「…簪。あなたは何もしなくていいの。私が全部してあげるから。だからあなたは、無能なままで、いなさいな…ほら、私が憎くてたまらないでしょ?」

「やめてよ…やめてよ…何でこんな…！」

「お願い…簪ちゃん…」

必死に首を振る簪に楯無は優しく言う。

「もう私には無理なの…止められないの…もう、簪ちゃんを傷付けるのも耐えられないの…このまま私の手で簪ちゃんを殺してしまうなんて…我慢出来ないの…だからお願い…私が死ねば…私を殺せば…必ず止まるわ…だから私の我が儘を聞いて欲しいの…」

「せめてあなたの…大切な…愛する…自慢の妹の…簪ちゃんの手で…私を…殺して…」

「お姉ちゃん…」

楯無が泣いている事は声を聞いているだけで分かった。きっとこんな事は言いたくはない。それでも私の為に…

唇を血が出るまで噛み締める。涙が目から零れてきて視界がぼやけてくる。けど止まらない。姉の…お姉ちゃんの為にも止まってはいけない。

そしてそんな楯無を嘲笑うかのように『霧纏の淑女』はランスの穂先を簪へと向け、何の躊躇いもなく突撃しようと構える。

簪は薙刀を呼び出し、構える。涙で前が見えない。手だって震えている。けど…やるしかない。

「こんな…駄目なお姉ちゃん…ごめんね…？」

「…うわあああああ！！！」

楯無の一言を聞くと同時に簪はスラスターに出力を回し全力で『霧纏の淑女』を…更識楯無を薙刀で刺し貫

「…駄目だ！！！」

こうとした所を何者かに横から思い切り突き飛ばされ地面を転がる。南光太郎だった。そして光太郎はそのまま二人の間に割って入るように立っていた。

限界だった。仲睦まじい姉妹が望まぬまま『亡国機業』の…悪の手により争い、殺し合う姿を見て、我慢など出来る筈も無かった。

「楯無さん…そんな悲しい事を言わないでくれ…そんなの…そんなの…悲し過ぎる…」

「簪さんも…そんな事しないでくれ…そんな事をしたら…もう後戻り…出来なくなってしまう…」

「光太郎さん！邪魔しないで！」

「光太郎さんに私の…私達の気持ちが…！」

「分かるさ…！」

言い募ろうとする更識楯無・簪姉妹を光太郎が遮る。

「俺も…今の君たちと同じように…俺の兄弟同然の男と…戦いたく
なかったのに…戦わされて…そして…殺したくないのに…殺したく
なかったのに…」

「まさかその人って…信彦…さん…？」

「…ああ…俺は信彦と…俺の兄弟同然だった秋月信彦と…望まぬま
まに戦って…戦い続けて…そして俺が…俺の手で…僕が、信彦を…
殺して…信彦を殺してしまっただんだ…！」

「「！？」」

血を吐くような光太郎の悲痛な叫びに楯無と簪が思わず沈黙する。

「け、けど、どうして信彦さんと…大切に…思ってたんですよね…
？」

恐る恐る簪が光太郎に尋ねる。

「…俺と信彦は…同じ日食の日に生まれた…ただそれだけの理由で
…『ゴルゴム』に拉致されて…俺と信彦は…改造人間に…ゴルゴム

支配者の後継者候補として殺し合う…『世紀王』に改造された…俺は何とか逃げ出せた…けど信彦は…信彦は脳改造を…」

「…ゴルゴム…世紀王…光太郎さん…貴方まさか…『ブラックサン』…!?」

楯無が光太郎の正体を悟り驚愕しながらも尋ねる。

暗黒結社『ゴルゴム』はこの手の組織にしては例外的に古くからこの世界に深く根を下ろし世界を裏から牛耳っており、政財界の有力者や科学者などに多数のメンバーや信奉者を抱えていた。

加えて一時は日本を占領するなどしていた為、裏社会に通じている更識家にはゴルゴムに関する資料が豊富に残っており、当然楯無も当主として全て目を通している。

故に楯無はゴルゴムに関してはかなり詳細な知識まで有している。ゴルゴムの支配者『創世王』を決定する際には五万年に一度、二人の改造人間…『世紀王』同士で殺し合わせる事、『世紀王』は日食の日に生まれたという条件がある事、あの時の『世紀王』の素体は人間であった事。

そして『世紀王』の片割れ『ブラックサン』は脳改造寸前に脱出し『仮面ライダー』を名乗りゴルゴムに戦いを挑んだ事、そして残る『世紀王』…『シャドームーン』はゴルゴムの指導者として『ブラックサン』と対峙し、多大な犠牲者を出したゴルゴムによる総攻撃を指揮し、そして最終的には『ブラックサン』により倒された事を、楯無は知っていた。

だがその『ブラックサン』が人間としての姿を持っていたとは…『

ブラックサン』が南光太郎であるとは、知らなかった。

「なら…『シャドームーン』は…!？」

「…信彦だ…信彦が再び俺の前に現れた時…信彦は信彦で無くなっていた…信彦は…ゴルゴムの世紀王『シャドームーン』になっていた…そして…シャドームーンは…俺と戦う事を…殺し合う事を…宣言した…」

「俺は人々を守る為に…そして信彦を助ける為にゴルゴムと戦ってきた…けど…いやだからこそ…シャドームーンと…信彦と…戦いたくなかった…殺し合いなんかしたくなかった…昔の信彦に戻って欲しかった…」

「だがそのせいで信彦に…シャドームーンに俺は敗れ…多くの人々がゴルゴムの犠牲となって…仲間も失った…だけどそれでも俺は…僕は最後まで信彦を元に戻そうと思った…」

「でも信彦は元に戻らなかった…だから俺は…僕は…シャドームーンを…信彦を…俺の…僕のこの手で、殺した…殺してしまったんだ…」

「だから楯無さんには…簪さんには…そんな事を…俺みたいに実の姉妹同士で殺し合うなんて事はして欲しくない! 簪さんにも…楯無さんにも…俺のように実の姉妹を殺して欲しくない! 二人には俺が…僕が信彦をこの手で殺してしまった時のようには! そして僕が信彦を殺してしまった後に味わった悲しみも! 苦しみも! 痛みも! 二人にも…もう誰にも味わって欲しくない! 味あわせたくないんだ!」

「だから簪さん！楯無さん！お願いだからそんな悲しい事言わないでくれ！しないでくれ！俺の…信彦を殺し…多くの人を助けられなかった俺の身体ならどうなってもいい！だから簪さんを！楯無さんを！こんな理不尽な…昔の俺と信彦のような理不尽な戦いから！痛みから！苦しみから！悲しみから！運命から！助けたいんだ！俺と同じ苦しみを味わって欲しくないんだ！！だから頼む二人とも…俺に…僕に…」

「君たちを守らせて…助けさせてくれ…」

「「光太郎さん…」」

あまりに壮絶で、悲惨で、悲劇的で…しかし人間的、あまりに人間的な血反吐のようにほとばしる光太郎の悲痛で、切実な独白と叫び

を楯無と簪は黙って聞くより他に無かった。

「頼む簪さん…楯無さん…信じて…俺を信じてくれ…」

光太郎は構わずに二人に懇願するが二人はどうしていいか迷っていた。

そこにスピーカーから声が響き渡る。

『光太郎さん！もういい…もういいの！』

女性の声だ。光太郎はその声に聞き覚えがあった。何故ならば…

「…杏子ちゃん！？」

信彦の妹…秋月杏子の声だった。

『そうよ光太郎さん！信彦さんの事は貴方だけで抱え込まなくてもいいの！』

更に信彦の恋人…紀田克美の声がそれに続く。

『私も…私達も苦しいから…私達も一緒に背負うから…そんなに自分を責めないで…だから光太郎さん…戦って！二人の為に…仮面ライダーとして戦って…助けてあげて！』

『楯無さん、簪さん…その人は私の…私達の為に辛い事も悲しい事も全部仮面で隠して…そして戦って、守ってくれた人なの！だから光太郎さんを信じて上げて！』

『俺からも頼むよ光太郎さん!』

更に佐原茂と佐原ひとみの声が続く。

『楯無も簪も…二人とも俺とひとみの大切な家族なんだ!俺は…俺達は今家族を失いたくないんだ!だから光太郎さん!二人を仮面ライダーとして…俺の代わりに助けてくれ!』

『楯無!簪!私からもお願い!光太郎お兄ちゃんは今私やお兄ちゃん…多くの人達を助ける為に戦って、そして助けてきたの!だから光太郎さんを…光太郎さんを、仮面ライダーを信じる私を信じて!』

『そうとも!兄貴は俺達を助けて…そして俺達と一緒に戦ってきたんだ!だから兄貴の強さは…仮面ライダーの事はこの霞のジョー様が保証する!』

『そうよ!楯無さん!簪さん!私が二人を信じているように…貴女達も私を…茂君を…ひとみちゃんを…血は繋がってないけど大切な家族と思っている…光太郎さんを、仮面ライダーを信じている私達を信じて!』

『私は楯無さんの分も簪さんの分も光太郎さんの…仮面ライダーの事を信じてる!だから光太郎さん!光太郎さんを…仮面ライダーを信じている私達の為に戦って、勝って!』

霞のジョー、的場響子、白鳥玲子がそれに続く。

『立て!戦え!光太郎!そして必ず二人を助ける!信彦の…俺の後輩の秋月信彦の為に戦って!二人を助けるんだ!』

『私はお二人の事も彼の事もよく分かりません…ですが彼が先輩と…風見志郎と同じく仮面ライダーであるならばきっと貴女達の力に…助けになってくれる筈です！』

滝竜介と佐久間健も三人に語り掛ける。

『それに二人共やつと…やつと仲良くなれたじゃないですか！だから死ぬとか殺すとか…そんな悲しい事言わないで下さい！』

『お願いします南光太郎さん！私は貴方を…貴方を信じている皆さんを信じますだから二人を…お嬢様達を助けて下さい！』

布仏本音と布仏虚も続けて叫ぶ。

そして最後に緑川ルリ子が口を開く。

『南光太郎！もっとしゃきつとしなさい！みつともない！貴方は仮面ライダーなのよ！？だったら女の子を…しかもこんなに沢山の女の子を心配させるなんて駄目に決まってるじゃない！』

『それにね！貴方は一文字隼人の、風見志郎の、結城丈二の、神敬介の、アマゾンの、城茂の、筑波洋の、沖一也の、村雨良の…何より本郷猛の後輩なんだから！だから胸を張りなさい！胸を張って仮面ライダーを名乗って、戦いなさい！そして必ず二人共助けなさい！私はきつと出来ると信じてるわ！』

続けてルリ子は楯無と簪に語り掛ける。

『確か織斑一夏が簪ちゃんに「完全無欠のヒーローなんかいない」

とか言ったとか聞いたわ：彼の言う通りよ。完全無欠のヒーローなんている訳がない。いるとしたら機械：いえ、機械でも無理だわ。だってヒーローとしての心を持った時点で例え機械だろうと悩み、苦しみ、葛藤して、後悔して、取りこぼして：その時点でヒーローは完全無欠たり得ないもの』

『「完全無欠のヒーロー」なんて神様や仏様と同じよ。そんなの、ただの都合のいい偶像：むしろ神様や仏様よりもいる確率は低いでしょうね』

『けどね、この世界には完全無欠ではないけど多くの人達を助けてきて：そしてこれからも守り続けていくヒーローは確かに存在するわ』

『彼らは完全無欠なんかじゃない。悩み、苦しみ、葛藤して、後悔して：泣いて、怒って、血を流して、傷付いて：その手を多くの血潮に染めて、時に助けられなくて：そんな人間的な、あまりに人間的なヒーローよ』

『けどね、彼らはそれでも：いえ、だからこそみんなの為に何度でも立ち上がってきたの。自分の痛みも苦しみも悲しみも痛みも仮面で隠して人類の自由と平和の為に戦う事を決意して、そうしてきたの。そして悪の組織を倒して、多くの人々を悪の魔の手から守って、救って：そうし続けてきたの』

『だから二人共、彼を：彼の先輩達を：今まで多くの人達を助けてきて、今貴方を助けようとしている彼を：「仮面ライダー」を私は信じているわ！』

『二人共、どうせ死ぬとか言うなら騙されたと思って：貴方達も信

じてみない？…例えこの世界に神も仏も…「完全無欠のヒーロー」
もいなかったとしても…仮面ライダーは…貴方達が信じて、望んで、
応援してくれるならどんな事だってやってのける仮面ライダーはい
る…って』

そこでスピーカーからの声は途切れる。

暫く沈黙する三人だが、『霧纏の淑女』はそれを見計らったように
ランスを構え、光太郎に向ける。

「ぐっ…！」

しかしそれまでのダメージが蓄積していた光太郎は足がもつれて膝
を付く。

「光太郎さん…」

そこに簪が口を開く

「私の…私達の…頼み…聞いて貰えませんか…？」

更に楯無もそれに続く。光太郎は二人に黙って頷く。

「お願いします…光太郎さん…私…光太郎さんの事…」

「そして仮面ライダーと…それを信じる人達を…信じます…だから
…」

「お姉ちゃんを！」

「簪ちゃんを！」

「そして私を、助けて!!」
「」

「ああ：助けるとも！この命に替えても楯無さんも！簪さんも！二人共：誰一人死なせやしない！君たちはこの『仮面ライダーBLACK RX』が必ず助け出してみせる！！」

二人の簡潔な：しかし心からの助けを求める叫びがあれば十分だった。光太郎の身体に力が漲る。そしてそれまでのダメージが嘘のようになり強く立ち上がると、『霧纏の淑女』：そしてその背後にいるであろう『亡国企業』を睨み据える。

「俺はお前に―お前達には決して負けない―屈しはしない―お前達の思惑通りになど、決して行かせはしない―」

「―お前達の野望を阻止し―今更識楯無と更識簪の二人を助けられるのなら、どんな事だとしてみせる―世界だって越えてみせる―」

どんな有り得ない奇跡だって起こしてみせる――

――覚悟しろ――姉妹を引き裂こうと――更識楯無と更識簪にかつての俺と同じ苦しみを与えようとする、全ての悪よ――

――俺は、お前達を――絶対に許さん！！――

右腕を前に突き出した後腰まで引き、左腕を肩の前に立てる。右腕を上へと突き上げ、手首を返しゆっくりと下ろす。そして右腕を左肩まで引き寄せ右斜め下に持っていった後腰に引くと同時に、左腕を右へと出し、水平に左へと持っていく、左腕を曲げて垂直に立てる。

「変身ッ！！」

動作が終われば腹部の『キングストーン』が反応し、周囲の体組織を『サンライザー』へと変化させ、光輝くと同時に光太郎の肉体を黒い肉体と真っ赤な目を持つバッタを模した改造人間の姿へと変える。

そして光太郎は再び腕を天に突き上げその身体から太陽の如き閃光を放ち、名乗る。

「俺は太陽の子！仮面ライダーBLACK！RX！！」

「罪もない多くの人々を苦しめ続ける『亡国機業』！互いを信じ、大切に思う美しき姉妹の絆を踏み躪り！引き裂き！あまつさえ命すら奪おうなど、この俺が許さん！！」

過酷な運命に抗い続け、人々と正義の為に陽光を受け生まれ変わった黒き太陽の勇者：11番目の仮面ライダー『仮面ライダーBLACK RX』は啖呵を切り終えると、仲睦まじき姉妹に理不尽で残酷な未来をもたらさんとする濃霧を晴らすべく戦闘を開始した。

「トゥア！」

南光太郎：仮面ライダーBLACK RXは飛び上がると今までのお返しとばかりに両足を揃えて飛び蹴りを『霧纏の淑女』へと叩き込む。

それをまともに受けた『霧纏の淑女』は吹き飛ばされ、どうにか体勢を立て直しランスを構えるが、その隙に仮面ライダーBLACK RXはパンチやキックの連打を浴びせる。

シールドを削られながらもどうにかしてそれを凌いだ『霧纏の淑女』はお返しとばかりにランスを突き出すが仮面ライダーBLACK RXは躲すと小脇にランスを挟み込み、動きを止めて逆に拳で滅多打ちにする。

そして仮面ライダーBLACK RXは更識楯無を『霧纏の淑女』から引き摺り出すべく拳を固め渾身の正拳突きを放つが、『アクア・クリスタル』から展開される水のヴェールによりその拳は阻まれる。逆に霧が散布され『清き熱情』を至近距離でまともに食らった仮面ライダーBLACK RXは大きく吹き飛ばされる。

そして立ち上がった仮面ライダーBLACK RXに対して『霧纏の淑女』はスラスターを噴かして飛び回りながらランスのガトリングや高圧水流などを一方的に浴びせ続ける。

「光太郎さん!？」

その様子を見ていた更識簪が思わず叫ぶ。たしかに仮面ライダーBLACK RX：南光太郎は強い。それは見ていてすぐ分かった。だが自由に飛び回れるIS相手に飛び道具で一方的に撃たれていては勝ち目などない。やはりISに勝てるのは：

そう考えていた簪だが、仮面ライダーBLACK RXは全く悲観していなかった。ガトリングや高圧水流を防御しながらも隙を：反撃の糸口を探っていた。

（ヤツは水を展開する時に一瞬の隙が出来る！それがチャンスだ！）
防御し続ける仮面ライダーBLACK RXに痺れを切らしたのか
『霧纏の淑女』は大技を決めようと『アクア・クリスタル』から水
を生成する。

だが、0.1秒の隙を伺い、それを突いてみせるくらいには諦めの
悪い仮面ライダーBLACK RXには十分過ぎる隙だった。

そして仮面ライダーBLACK RXは『サンライザー』を発光さ
せ、悪への怒りのままにその姿を変える。

そして仮面ライダーBLACK RXは身体を液状化させると『霧
纏の淑女』に纏わりつくように執拗に攻撃し、地面へと叩き落とす。

同時にゲルにも似た液体もまた地面へと降り立ち、やがて人型へと
形を変え、その姿を現す。

そこに居たのは今までと違い青と銀を基調とした体色に怒りに燃え
ているかのような赤い目をした仮面ライダーBLACK RXであ
った。

「俺は怒りの王子！RX！バイオ！ライダー！」

その怒りを激流に変え悪を飲み込み、押し流す青い怒濤：『バイオ
ライダー』へと姿を変えた仮面ライダーBLACK RXはその優
れたスピードを生かして『霧纏の淑女』へと突っ込んでいく。

『霧纏の淑女』はガトリングや高圧水流で迎撃しようとするが、機

敏に動くバイオリライダーには中々当たらない。仮に直撃コースに入っても：

「弾が身体をすり抜けているの!？」

簪が叫んだようにガトリングの弾は悉くバイオリライダーの身体を透過していく。バイオリライダーの最大の特徴はその肉体を自在に液体化させる事が出来る点だ。その為先ほどのように肉体を完全に液体化させなくとも弾丸やレーザー程度であれば身体をすり抜けさせる事も可能である。

「バイオブレード！」

更に接近するとバイオリライダーは左腰へと両手を回し、光を結晶化させ抜刀するように両刃の剣『バイオブレード』を実体化させ、『霧纏の淑女』と斬り結ぶ。

俊敏に動き回り張りつくように『バイオブレード』を振るうバイオリライダー相手にランスでは分が悪いと見たのか『霧纏の淑女』は蛇腹剣を展開せずに斬り結ぶ。

しかしバイオリライダーの軽やかな斬撃の連携にシールドが削られていき、距離を取ろうと『霧纏の淑女』はスラスターを噴かして逃れようとする。

「逃がさん！ バイオアタック！」

しかしバイオリライダーは最初に見せたように身体を液体化させ、そのまま宙を飛ぶや連続で高速体当たり『バイオアタック』を繰り返す、またも地面へと叩き落とす。

そこで『霧纏の淑女』はもう一人の敵：簪へと標的を変えるとラン
スに向けてガトリングを乱射する。

「危ないっ！…うわっ！」

しかしバイオリダーは液体化したまま簪の前まで回り込み実体化
するとガトリングの弾をまともに食らう。

「何で弾が…そうか！」

何故か弾が透過せずにバイオリダーに直撃したのか疑問に思った
簪だが、すぐに原因に気付く。

今バイオリダーの後ろには自分がいる。もし透過させてしまった
自分に弾が飛んでくる。だから透過させずに弾を受けているのだ。
そしてバイオリダーの体力は削られていく。

それに気付いたのか『霧纏の淑女』はバイオリダーに集中放火を
加え、更に霧を散布させると『清き熱情』を発動させ派手にバイオ
ライダーの付近で爆発させる。

「ぐああああっ！？」

バイオリダーはそのダメージにより膝を付く。

バイオリダーは液状化によりほぼ無敵の防御力を誇る反面、液状
化しない状態での防御力はRXの姿よりも低下する。

特に熱や炎に対してはかなり弱くなるため、液状化しないで簪を庇

えばこうなるのは必然であつた。

「光太郎さん！ やっぱり私が…！」

「何のこれしき！ こんなもの、君や楯無さんが味わっている痛みや苦しみ…そして悲しみに比べれば！」

しかしバイオライダーは再び立ち上がる。再び『霧纏の淑女』が霧を散布し『清き熱情』を発動させるのとほぼ同時にバイオライダーはベルトを光らせ、姉妹と自身の深い悲しみに応えるようにその姿を再び変える。

『清き熱情』の爆発による爆風と煙が立ちこめる中、勝負を決めようと『霧纏の淑女』はランスを構え煙の中へと突っ込んでいく。

しかし煙の中から伸びてきた腕が槍の穂先を握り、勢いを完全に止める。『霧纏の淑女』が腕から槍を引き抜こうとするが小揺るぎ一つしない。逆に煙の中から出てきたもう一本の腕により派手に殴り飛ばされる。

やがて煙が晴れると今度は黒と黄色主体の体色に血涙を流しているかのような顔面をした姿へと変わったバイオライダーが立っていた。

「俺は悲しみの…そして炎の王子！ RX！ ロボライダー！」

悲しみを炎に、涙を光に変え重甲と剛力で敵を蹴散らす機鎧の銃士…『ロボライダー』はその肉体を光輝かせる。

『霧纏の淑女』は構わずにガトリングや高圧水流を撃ちまくるがロボライダーは簪の前に立ち全て受け切る。しかもロボライダーはい

くら弾を受けても全く堪えた様子がない。

ならばと先程バイオライダーにダメージを与えたように霧を散布し『清き熱情』を発動させるが。

「無駄だ！俺は炎の王子！炎…そして熱の力は俺のエネルギーだ！」

逆にロボライダーは爆炎や熱を吸収して己のエネルギーへと変える。

ロボライダーはバイオライダーとは対照的に敏捷性こそ落ちるがその分高い防御力と剛力を持ち、炎や熱を己のエネルギーとする事が出来る。

「ボルテックシューター！」

ロボライダーは右腿付近に手を持っていくと光を結晶化させ光線銃『ボルテックシューター』を出現させ、構えると簪の前に立ちはだかったまま『霧纏の淑女』と真っ向から撃ち合いを展開する。

クライシス帝国随一の銃の名手でもある機甲隊長『ガテゾーン』にも撃ち勝った銃の腕もあり、やがてロボライダーのボルテックシューターは一方的に『霧纏の淑女』を撃ち抜き始める。

スピードと液状化を生かしたヒットアンドアウェイがバイオライダーの得意とする戦い方なら足を止めて正面から殴り合い、撃ち合うのがロボライダーの得意とする戦い方だ。特に背後にいる簪を庇いながら戦うには最適だ。

だが『霧纏の淑女』は水のヴェールでボルテックシューターを防ぐとスラスターを噴かして飛び上がり円を描くように高速飛行しながら

ら簪へと集中放火を仕掛ける。

「そうはさせるか！」

それをロボライダーが盾となり防ぎつつボルテックシューターを撃ち返すが、スピード差もありやがてロボライダーは防戦一方となる。バイオライダーへと姿を変える余裕もない。

「くっ…このままでは…！」

必死に簪の盾になりながらも打開策を考えるロボライダーだが、中々いい案が思い浮かばない。そこに『霧纏の淑女』が再び水を展開する…が、横合いからバツタに似た姿をしたバイクが『霧纏の淑女』に体当たりを仕掛け、叩き落とす。

「アクロバッター！来てくれたのか！」

青い体色をしたバイクに似た光機動生命体『アクロバッター』であった。かつての相棒『バトルホッパー』が仮面ライダーBLACK RXの進化と共に生まれ変わった、頼もしい相棒だ。

そんな相棒に應えるように首を振り応えてみせるとアクロバッターは再び『霧纏の淑女』を撥ね飛ばす。

更にアリーナの壁を突き破り何かが『霧纏の淑女』に体当たりをかわし、弾き飛ばす。

「ライドロン！」

それはクライシス皇帝の政策に反対したワールド博士が設計し、光

太郎が組み上げ、クジラ怪人の生命のエキスを受け機動した重装騎マシン『ライドロン』であった。

どちらも自らの意志を持ち仮面ライダーBLACK RXの呼び掛けや、時に自身の判断で仮面ライダーBLACK RXを助けに駆け付ける心強い仲間だ。

更にライドロンは車体前方に大型クロウを展開すると『霧纏の淑女』を挟み込み、そのまま走り出す。そこにアクロバッターも突っ込んで『霧纏の淑女』を挟み込むように体当たりを仕掛ける。そしてサンドイッチ状態で水のヴェールとシールドを削り続けていく。

その隙にロボライダーは簪へと向き直り何やら『打鉄式式』を探っていたが

「ごめん！少し借りるよ！」

「へ？ちょっと!？」

やがてロボライダーは打鉄式式の一部に手を当て意識を集中させる。すると簪のハイパーセンサーに大量の情報が押し寄せ、処理されていくのが見えてくる。

ロボライダーはありとあらゆるコンピューターを自在に操作出来る。勿論それはISとして例外ではない。それを応用しロボライダーは『打鉄式式』を通じて遮断された『霧纏の淑女』との『コア・ネットワーク』を無理矢理再開させると同時に、今回の元凶となった『何か』の位置を探っていた。そして見つけ、簪のハイパーセンサーにも位置情報が映し出される。

「恐らく左胸に仕込まれた外部装置が原因だろう…こちらからもアクセス出来ない以上直接破壊するしかない！」

「直接って…一歩間違えたらお姉ちゃんが!？」

ロボライダーの発言に食ってかかる簪だが、やがて二台のマシンを引き剥がした『霧纏の淑女』が攻撃を開始し、ロボライダーが盾になると中断される。

「このままいけばジリ貧だ!やるしか…やるしかない!」

「で…でも…」

「頼む!俺を…信じてくれ…!」

ロボライダーは未だ盾になっているが蓄積ダメージがここに来て堪えているのか、足元がふらついてきている。いつかは限界を迎えるだろう。しかし構わずにロボライダーは簪を守る為に敵の猛攻に身を曝している。

「簪ちゃん…仮面ライダーを…光太郎さんを信じてあげて?」

そこに楯無が声を上げる。

「だって簪ちゃんの為にずっと盾になっていてくれたんだもの…私は光太郎さんを…仮面ライダーを信じるわ…」

「だから簪ちゃんも仮面ライダーを…彼を信じている私を…信じて…」

「楯無さん…」

「光太郎さん…私はあなたを信じます…だから…お願いします…簪ちゃんを…」

それを聞くと意を決して簪はロボライダーへと尋ねる。

「…私に…何か出来る事がありますか？」

「簪さん…ありがとう！ならほんの少しでいい…ほんの少しでいいからヤツの隙を作ってくれないか？」

「…お安い御用です！」

簪は力強く頷くと『山嵐』を展開する。一部は破損しているが使用には問題無い。

「…行け！」

そして『山嵐』からミサイルが発射される。『霧纏の淑女』はそれを迎撃しようとするが、ミサイルの多さや微妙に一発一発軌道が違いう事もあり中々迎撃出来ない。

それでもどうにかして『霧纏の淑女』は迎撃を終えたが、よりによってロボライダーに無防備な背後を曝す形となった。

その隙にロボライダーは仮面ライダーBLACK RXの姿に戻り、飛び上がる。

そして後ろ向きに宙返りしながら前進し、揃えた両足を赤く発光さ

せながら飛び蹴りを放つ。

「RXキック!!」

その蹴りがメインスラスタを一撃で粉碎し、推力を失った『霧纏の淑女』は墜落する。

『霧纏の淑女』は霧を散布し、蜃気楼で大量の虚像を投影し仮面ライダーBLACK RXの目を欺こうとする。

「キングストーンフラッシュ!」

しかしベルトから放たれるキングストーンエネルギーの閃光が虚像を全て掻き消し、逆に『霧纏の淑女』の動きを止める。そして仮面ライダーBLACK RXは勝負に出る。

「リボルケイン!!」

仮面ライダーBLACK RXは『サンライザー』に手を当て光を結晶化させると、悪を打ち砕く光の杖『リボルケイン』を抜き放ち、構える。

それに対抗するように『霧纏の淑女』も身に纏っていた水をランスの先端へと集中させる。小型気化爆弾4発分のエネルギー総量を秘めた一撃必殺の大技『ミストルテインの槍』だ。

「トゥア!!」

仮面ライダーBLACK RXは一回地面を叩く動作をした後高く飛び上がる。

『霧纏の淑女』はランスを持ったまま仮面ライダーBLACK RXを見据える。

そして仮面ライダーBLACK RXは落下の勢いを乗せ『霧纏の淑女』に『リボルクラッシュ』を、『霧纏の淑女』は迎え撃つように仮面ライダーBLACK RXに『ミストルテインの槍』を放つ。

そして着地すと同時に杖と槍が突き出され、交差する。

仮面ライダーBLACK RXのリボルケインは『霧纏の淑女』の左胸を貫いていた。

『霧纏の淑女』のランスは仮面ライダーBLACK RXの腹部を刺して：いなかった。その穂先は、腹部から反れ、仮面ライダーBLACK RXには当たっていなかった。

楯無が反らした。最後の力を振り絞り、せめてもの抵抗として一瞬だけコントロールを奪い返し、槍の穂先を反らしたのだ。

それを証明するかのように顔面部の装甲が碎け散り、楯無の素顔が漸く曝される。

「：あり：がとう：仮面：ライダー：」

そして楯無は仮面ライダーBLACK RXにいつものような笑顔で：穏やかで、満足そうですらある笑みを浮かべながらそれだけ告げると静かに目を閉じ、ゆっくりと仰向けに倒れていく。

それと同時に仮面ライダーBLACK RXは大きく飛び退き距離

を取ると、楯無に背中を向けてリボルケインを回転させ『R』の字を描くようにリボルケインを振り、残心を決める。

「お姉ちゃん!？」

そこに簪が駆け寄り、楯無を抱き起こす。

「お姉ちゃん! 嫌だよ! 目を開けてよ! こんな嫌だよ! やつと… やつと仲良くなれたのに… こんなの… 嫌だよ! お願いだから… もう一回目を開けてよ!!」

簪の目から大粒の涙が溢れてくる。簪にはただ泣くことしか出来なかった。そして簪の頬を伝った涙はやがて楯無の頬へと滴り落ちる。

―その時、不思議な事が起こった―

「…泣かないで？簪ちゃん…」

「…えっ…？」

「…私は…大丈夫だから…簪ちゃんこそ…無事で…良かった…」

胸を貫かれた筈の更識楯無は目を開き、いつものように笑いながら、優しく更識簪の頬に伝う涙を指で拭っただ。

「嘘…信じられない…」

「不思議な事…としか言い様が…」

管制塔内にいた布仏虚・本音姉妹はモニターに映っている光景を見て信じられないと言いたげな表情をしていた。

コア・ネットワークをロボライダーが無理矢理開通させた影響でこちらにも『霧纏の淑女』に何かが仕込まれていた事や、それが外部から直接破壊しなければならぬ事など大体の状況はこちらにも伝

わって来ていた。

だからこそ虚と本音には今日の前のモニターに映っている更識楯無・簪姉妹の様子と、『霧纏の淑女』のデータ、何より仮面ライダーBLACK RXがやった事が信じられなかった。

「…別に兄貴がやった事は不思議でも何でもないぜ？のほほんちゃん」

「そうよ、むしろこれが…光太郎さんが今までやってきた事なんだから」

「光太郎さん、見た目だけじゃなくて…こういう所も変わってませんね」

「当たり前だよ、響子さん。光太郎さんは仮面ライダーなんだから…な、ひとみ」

「うん。光太郎お兄ちゃんはずっと私達のヒーローで…私達の太陽だったんだから」

「佐原室長達だけじゃないわ。私や克美さん…ううん、みんなのヒーローで、みんなの太陽よ」

「そうよ。みんなが信じて、求めて、応援すれば応えてくれる…それが光太郎さん…仮面ライダーなんだから」

「こいつは和也さんにも自慢出来そうだ…俺にはこんなにいい後輩がいる、ってね」

「ええ。和也さんや先輩…仮面ライダー達も、竜介君の話を聞いた
ら聞いたらきつと喜ぶよ」

「南光太郎…10人目の地獄の道連れで…11人目の仮面ライダー、
か…」

しかし布仏姉妹とは対照的に南光太郎を…そして仮面ライダーを知
る者達はむしろ当然と言わんばかりの態度で目の前の光景を誇らし
げに見ていた。

モニターに映っているのは泣きじゃくる簪を優しく抱き締めながら
頭を撫でている楯無の姿。

そして仮面ライダーBLACK RXが放った渾身の一突きが『霧
纏の淑女』の左胸に仕込まれた装置のみをピンポイントで破壊した
事を示すデータ画面であった。

それは、奇跡だったのかもしれない。不思議な事だったのかもしれ
ない。

だが決して偶然ではなく、むしろ起こるべくして起こった事だ。

更識楯無と更識簪の姉妹愛が、絆が、信じる心が

その周囲の人間の願いが、信じる心が

何より南光太郎がそれに応えようと身体を、心を、信念を、そして魂を燃やした事に応えて起きた：仮面ライダーBLACK RXが起こしてみせた必然とも言える『奇跡』だ。

その事を証明するかのように、そして一組の姉妹に輝かしき未来を太陽の如く照らしだす出すかのように：『仮面ライダーBLACK RX』南光太郎は更識楯無と更識簪に背を向けたまま黙して、しかし雄弁に、雄々しく、悠然と大地を踏みしめ、立っていた。

アリーナ内で沈んでいく夕陽を、南光太郎は一人で眺めていた。

やや離れた光太郎の背後では更識楯無と更識簪の姉妹が仲睦まじく話している。それを邪魔しないように光太郎は少し離れて、二人に背を向けた状態で夕陽を眺めていた。

そして自身と兄弟同然に育った男：秋月信彦の事を思い浮かべる。

―信彦！今度の試合、絶対お前より先に点を入れてやるからな！

―俺だって負けないさ光太郎！だから次の試合も絶対に勝とう！

―当たり前だろ、信彦！僕と信彦がいれば―絶対勝てるさ！

―なあ光太郎、一つ頼んでいいか？

―どうしたんだ？急に改まったりなんかして―

―もし俺に何かあったりしたら―杏子の事―頼むな

―何縁起でもない事言ってるんだよ！それに当たり前だろ！信彦も
杏子ちゃんも―血は繋がってなくても―家族なんだから！

―そうだったな―悪い悪い！

（信彦―）

そこにアクロバッターとライドロンが寄り添うように光太郎に近寄ってくる。光太郎は戦友である二台に笑って礼を言う。

「ありがとう、アクロバッター…ライドロン」

（ありがとう、バトルホッパー…ロードセクター…そしてクジラ怪人…）

「「光太郎さん！」」

そこに秋月杏子と紀田克美が走り寄ってくる。

「杏子ちゃん…克美さん…」

「良かった…また…また会えて…」

「私も杏子ちゃんも…ずっと心配してたんだから…」

杏子は光太郎に抱きつき泣き始める。克美も目に涙を浮かべている。

光太郎は胸にくるものを抑え、敢えて明るく、陽気に笑って答える。

「ごめんごめん！連絡入れるの忘れててさ…それにしても杏子ちゃん、綺麗になったね…克美さんはあんまり変わってないかな？」

「…光太郎さんは…昔のままだね…見た目も…そんな所も…」

「ほら、もう泣かない。光太郎さんも困ってるわよ？」

光太郎に泣き笑いの状態で答える杏子に克美が笑いながら嗜める。

そんな杏子と克美に光太郎は微笑んで改めて礼を述べる。

「…杏子ちゃん、克美さん…ありがとう」

「光太郎さん！」

「光太郎お兄ちゃん！」

続けて佐原茂と佐原ひとみも歩いてくる。

「ありがとう、光太郎さん！俺の家族を…楯無と簪を助けてくれて
！」

「私からもありがとう…また、光太郎お兄ちゃんに助けられちゃっ
たね」

「お礼を言いたいの俺の方だよ、二人とも！…茂君、ひとみちゃん…
ありがとう」

そう言って光太郎は茂とひとみに笑いかける。

「「光太郎さん！」」

「兄貴！」

「玲子ちゃん！響子ちゃん！ジョー！」

「もう！私達だけじゃなくて秋月局長や紀田専務まで心配させちゃ
って！…でも、良かった…」

「ええ、私にとって楯無さんも簪さんも…そして光太郎も…大切な人ですから…無事で…嬉しいです」

「ま！俺は最初から兄貴ならやってくれるって、無事戻ってくるって信じてたけどさ！」

「玲子ちゃん…響子ちゃん…ジョー…ありがとう」

光太郎は素直にやってきた白鳥玲子、的場響子、霞のジョーに感謝の気持ちを伝える。

「お疲れ様、光太郎。悪いな、厄介事に付き合わせて」

「ご協力ありがとうございました、南光太郎さん」

更に滝竜介と佐久間健も光太郎に声を掛ける。

「先輩…佐久間さん…ありがとうございます」

「気にするな。むしろ感謝したいのはこっちの方さ」

「ええ、こうして仮面ライダーに会えて…仮面ライダーBLACK RXに会えて、感謝しています」

そう言って捜査官二人は光太郎と顔を見合せ笑い合う。

「それでこそ本郷猛の後輩よ、光太郎君」

「ルリ子さん…」

「お礼ならいらないわ。私は私がやりたいようにやっただけ…それよりあの娘たちにお礼を言いなさい?」

「…はい!」

更にやって来た緑川ルリ子に促され、光太郎はIS学園の制服を着た二組の姉妹の下へと歩いていく。

「あ、光太郎さん」

「…ありがとう、虚さん、本音さん…そしてありがとう、楯無さん、簪さん」

「…むしろ感謝したいのは私達の方ですよ…それに…」

四人を代表して答える楯無の言葉に首を振り、光太郎は笑って告げる。

「…君たちが俺を信じてくれたから…応援してくれたから…俺はあそこまで戦えた。そして勝利出来たんだ。だから、どうしてもお礼を言いたかったんだ」

「光太郎さん…」

「さ、楯無さんも簪さんも響子ちゃんや茂くん、ひとみちゃんも心配してるし…行ってきたよ!」

「「…はい!」」

そして光太郎と楯無と簪は顔を見合せ微笑み合うと楯無と簪、布仏姉妹は響子や茂、ひとみ達の下へと歩き始める。

その後ろから歩き出した光太郎の脳裏に声が響き渡る。

『―南光太郎』

(…この声…キングストーン！？)

『―南光太郎、お前は秋月信彦を殺し、クライシス五十億の民も救えず―そして私がある限り死ぬことすら儘ならないであろう』

事実だ。南光太郎は改造人間である。しかも五万年の寿命を持つ『創世王』候補として改造されている。寿命も常人はおろか他の改造人間の先輩達よりも長いのも知れない。つまり光太郎はやがて、独りきりになる可能性がある。

『―だからこそお前は皆を明るく―一人でも多く、一分でも長く闇を払い人々の為に輝き、照らし続ける太陽であれ―お前がそう望むのなら―そうあり続けるのであれば―私はお前の為にどのような奇跡でも起こしてみせよう―』

(―ありがとう、キングストーン―)

そして光太郎は改めて決意を固める。

―信彦の為にも、クライシス帝国の人々の為にも、皆を明るく照らす太陽であろう。

―一人でも多く、一分でも長く輝き続ける太陽であろう。

―そしてあの姉妹のようにそれで救われる人が少しでもいるのなら―

―俺は太陽として―仮面ライダーとして生き続けていける。

―ありがとうございます、先輩方―

そして光太郎は陽気に笑うと団体へと混ざる。

「さ、そろそろ行こうか！ 簪さんも楯無さんも織斑一夏君に早く会いたいだろうしさ！」

「フッフ：そうですね」

「お：お姉ちゃん！？」

「あら、簪に新たな恋のライバル出現？ ライバルと言えば…」

「私、絶対に負けませんからね？ 杏子さん」

「私こそ受けて立ちますよ？ 玲子さん：それと佐原室長、仕事以外では杏子さんでいいからね？」

「分かりました、杏子さん：と言ってもこれから仕事がなあ…」

「大丈夫よ、『打鉄式』なら茂君やひとみちゃん、杏子ちゃんがいるんだからすぐに片付くわ」

「それに『霧纏の淑女』なら私も少しは手伝えますから」

「私達で良ければ力になれますし：これでも整備科の生徒ですから」

「私は志望ですけど〜あとジョーさんは賭けに負けたので私達のお夜食は奢りでお願いしますね〜」

「なああのほんちゃん：毎回思うんだけど俺の扱いが本気で酷くないか？ しかも負けた扱いだよ…」

「仕事と言えば…二人はこれからどうするの？」

「私と竜介君はこれから本部に戻って今回の件について報告しなければなりませんから」

「そういう訳でここにはそんなに長居は出来ませんね、残念ですけど」

「そう…なら光太郎君、少し付き合いなさい！これは女の子を心配させた罰なんだから！」

「ルリ子さん、ズルい！」

「ハハハ…お手柔らかにお願いします」

こうして更にカオスを増した一団は夕暮れ空の下めいめい談笑しながらアリーナから歩き去った。

—こうして、美しき姉妹の絆を踏み躪り、引き裂こうとした卑劣な『亡国機業』の企みは阻止され、悪の野望はまた一つ潰えた。

―しかしこの世に悪がある限り、仮面ライダー達の戦いに決して終わりは無い。

―負けるな！南光太郎！

―戦え！仮面ライダーBLACK RX！

―悪の野望を打ち碎き、世界に―そして更識楯無と更識簪に平和を
もたらす、その日まで!!

（後書き）

本作品を最後までお読み頂きありがとうございます。

双方原作への冒涇と迷いながらも嵐の中に飛び込んでいくかのよう
な気持ちでまたも書き上げてしまいました。

このような組み合わせが思い付きましたのは『同性の兄弟姉妹』で
真っ先に思い浮かんだという実に安直な理由からです。毎回の事な
がら各ファンの皆様方には申し訳なく思う次第であります。

今回は分割にしようとも考えましたが、分割する機会を見失いその
まま突っ走ってしまいました。誠に申し訳ございません。

では拙作を最後までお読み頂いた事に感謝申し上げつつ後書きとさ
せて頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5952z/>

姉妹の太陽

2011年12月19日22時18分発行